
伊 奈 町

大山遺跡 第9次

県立がんセンター病棟新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

首都圏に位置し、近年の急激な人口の増加がみられる埼玉県は、医療需要が増大するとともに、県民から医療の多様化及び高度化が望まれておりますが、それらに適切に対応していくため、計画的に医療供給体制の整備や拡充を図っております。

伊奈町に所在する県立がんセンターは、先端医療を担う施設として、昭和50年11月に開設されましたが、増加する医療需要に対応するため、病棟、病床の増設等をすすめるなかで、本館の一部建て替えに伴う病棟が新設されることになりました。

県立がんセンターの敷地は、大山遺跡として知られ、これまでも開発にあたって随時発掘調査が実施され、今回の増設に伴う発掘調査は第9次にあたることになります。

大山遺跡はすでに各時期、各時代における有数な遺跡の存在が明らかにされてきておりますが、旧石器時代では、ナイフ形石器を主体とする時期の石器群が検出され、縄文時代では、中期後半の集落がほぼ完全な形で調査されております。

また、古墳時代では前期と後期の集落が発見され、近くに古墳群の存在しない地域にあって、当時の生活様式の貴重な資料を得、平安時代では貴重な製鉄遺構やそれに伴う集落跡が検出され、全国に先駆けて製鉄炉の構造が解明されるなど、こ

れまでに多数の成果を上げております。

今回の調査では、平安時代の住居跡が1軒検出され、貴重な一例を追加することができました。また、縄文時代では、住居跡こそ発見されませんでしたが、中期の土壇2基を検出し、包含層からは中期と晩期の土器群を得ることができました。

今後も、機会あるごとに埋蔵文化財の発掘調査が行われるものと思われませんが、新たな発見と資料の蓄積によって、大山遺跡の全体像が明らかにされていくものと期待されます。

限られた資料ではありますが、本報告書が大山遺跡を含めた地域における地域史解明の基礎的な一資料となり、また、埋蔵文化財保護の基礎資料として、さらには学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査から報告書刊行に至るまで御指導、御協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県衛生部県立病院課、県立がんセンター事務局、伊奈町教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成8年6月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

- 1 本書は埼玉県北足立郡伊奈町に所在する、大山遺跡第9次調査に関する発掘調査報告書である。遺跡の代表番地と、発掘調査に対する指示通知は以下の通りである。

大山遺跡第9次（略号OOYM）
北足立郡伊奈町大字小室字大山818番地他
平成7年4月25日付け教文2-16号
- 2 発掘調査は、埼玉県衛生部県立病院課による県立がんセンター病棟新築に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整を経て、県立病院課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 発掘調査は平成7年4月1日～平成7年4月30日まで行い、1500㎡について実施した。
- 4 発掘調査は、金子直行と石坂俊郎が行った。
- 5 現場での写真撮影は、金子直行と石坂俊郎が行った。
- 6 報告書作成事業は平成8年度に受託し、平成8年4月1日～4月30日まで金子直行が担当し、実施した。

なお、発掘調査と整理事業の組織は3頁に示したとおりである。
- 7 出土品の整理及び実測、作図、作表、写真撮影は金子が主に行い、平安時代の遺物については宮瀧由紀子が行った。
- 8 遺跡の基準点測量は、株式会社日成プランに委託した。
- 9 本書の執筆は主に金子が行い、I-1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、平安時代の遺物を宮瀧が行った。
- 10 本書の編集は、当事業団資料部長、同副部長の監修のもとに、資料部資料整理第一課の金子が行った。
- 11 本書に掲載した資料は、埼玉県立埋蔵文化財センターが平成9年度以降管理・保管する。

凡例

1 本書の遺跡全体図におけるX・Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

2 本遺跡におけるグリッドの呼称は、北西杭が基準となり、西から東へ向かってA～Q…、南北方向は0を起点として北方向へA～キ…、南方向に1～7…となる。

また、グリッドは第6次調査及び第7次調査と共通している。

3 グリッドは10mを大グリッドとして設定し、大グリッド内に2mの25の小グリッドを設定した。遺構の位置等の表記は、大グリッドを基準としている。

4 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図

住居跡…1/60

土壇…1/60

遺物

縄文時代の土器・石器…1/3

平安時代の土師器・須恵器…1/4

その他のものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度表記して示している。

5 縄文時代の遺物分布図における●は中期の土器群、○は晩期の土器群を表している。

6 平安時代の須恵器は、断面を黒く塗りつぶしてある。また、須恵質土師器については、土師器と同様に断面は塗りつぶしてはいない。

7 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。

8 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の1/50000の地形図を使用した。

9 本書に使用した参考・引用文献は（著者、発行年）で表記し、巻末にその一覧表を掲載した。

目次

序	
例言	
凡例	
I. 調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 第9次調査の概要	8
IV. 発見された遺構と遺物	10
1. 住居跡	10
2. 土壌	19
3. グリッド出土遺物	19
V. 発掘調査の成果と課題	24
1. 縄文土器について	24
2. 土器群による縄文中期の集落分析	27
3. 加曾利EⅡ式土器細分の再検討	33
4. 奈良・平安時代について	40

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第13図 グリッド出土縄文土器(2)	21
第2図 遺跡周辺の地形図	5	第14図 縄文時代・平安時代住居跡配置図	24
第3図 グリッド配置図	7	第15図 大山遺跡出土の縄文土器	26
第4図 調査区全体図	9	第16図 縄文時代中期の住居跡集成(1)	28
第5図 第1号住居跡	11	第17図 縄文時代中期の住居跡集成(2)	29
第6図 第1号住居跡遺物分布図	12	第18図 縄文時代中期の住居跡集成(3)	30
第7図 第1号住居跡出土遺物	13	第19図 加曾利EⅡ・Ⅲ式土器段階別変遷図	38
第8図 第2号住居跡と土壌	15	第20図 出土遺物段階別分類図(1)	41
第9図 縄文土器分布図(1)	16	第21図 出土遺物段階別分類図(2)	42
第10図 縄文土器分布図(2)	17	第22図 段階別集落変遷図(1)	43
第11図 縄文土器分布図(3)	18	第23図 段階別集落変遷図(2)	44
第12図 グリッド出土縄文土器(1)	20	第24図 大山遺跡周辺の遺跡	46

図版目次

図版 1 上 遺跡全景

下 第 1 号住居跡（上から）

図版 2 上 第 1 号住居跡

下 第 2 号住居跡

図版 3 第 1 号住居跡遺物出土状況

図版 4 第 1 号住居跡出土遺物

図版 5 上 第 1 号土壇

下 第 2 号土壇

図版 6 上 縄文土器（1）

下 縄文土器（2）

図版 7 上 縄文土器（3）

下 縄文土器（4）

図版 8 上 縄文土器（5）

下 縄文土器（6）

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、人口増加、高齢化等に伴い、高度で専門的な医療機関の整備を行ってきた。県立がんセンターは、がんに関する医療及び研究の中核機関として設立されて以来、設備の充実が図られている。

今回、本館の一部建て替えに伴う病棟の新設が計画され、平成4年12月17日付がんセ第508号で、県立がんセンター総長から文化財保護課長あて「埋蔵文化財の取扱いについて」の照会があった。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種開発事業に対応するため、開発部局と事前協議を行い、文化財保護と開発事業との調整を進めており、県立がんセンター建設に伴う過去の調査成果から、本照会箇所の大半が調査終了範囲に含まれることが明らかであったため、平成5年2月8日付け教文第963号で次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

遺跡名 大山遺跡
種 別 集落跡
時 代 縄文～中世
所在地 伊奈町大字小室818他

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地の大半は、過去に発掘調査が実施され、記録保存がなされており、一部については未調査である。未調査箇所について現状を

変更する場合、文化財保護法第57条3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通知を提出すること。

なお、工事の実施に際しては、文化財保護課の職員が立会調査を実施する。

その後、工事計画が一部変更され、工事区域に含まれる未調査範囲が増加することとなった。そこで、文化財保護課と県立がんセンターでは、保存のための協議を重ねてきたが、再度の計画変更が不可能となったため、やむを得ず、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査の実施については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と県立がんセンター、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等を中心に協議が行われた。その結果、平成7年4月1日から4月30日までの予定で発掘調査が実施されることとなった。

記録保存の発掘調査に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条3第1項の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは同法57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

なお、調査届に対する指示通知番号は、教文第2-16号である。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査作業

大山遺跡第9次の発掘調査は、平成7年4月1日から、平成7年4月30日までの、丁度1ヵ月間に亘って行われた。

4月1日から発掘調査の事務的な準備を行い、4月10日より表土除去作業を開始する。

駐車場にされていた調査区の一部は、地表より約70cm程が表土と化しており、礫等が敷き詰められていた。この攪乱は関東ローム層のハードローム中にまで及んでおり、その結果、大半の遺構は検出できない状態となっていた。多量の礫混じりの表土を除去するのに時間がかかり、約1週間程作業が続いた。

4月17日より、表土除去の終了した箇所から、遺構確認を平行して行った。その結果、攪乱の及んでいない調査可能な部分が、約350㎡程であることが判明した。

この調査可能な範囲内においても、木の根等の攪乱が著しく、攪乱部分とプライマリーな部分の割合が約半々といった感じを受けた。

検出された遺構は古墳時代の住居跡1軒、平安時代の住居跡1軒、縄文時代の土壌2基であった。

4月19日から遺構の調査を開始した。第1号住居跡のプランを明確にしてから、土層ベルトを残して掘り始めた。確認時にプランが明確ではなく、遺構の重複とされていたが、掘り進めて行くと壁の上部が崩落していることが判明した。壁は比較的深くしっかりとしたものであったが、確認面部分で崩落しており、やや一回り大きな状態を呈していた。

覆土には須恵器の坏や甕が散在していたが、甕はやや纏まって出土した。

4月24日から住居跡のカマドの調査を始め、4月26日に終了した。写真撮影を終了して平面図を作成し、第1号住居跡の調査を終了した。

第1号住居跡の調査と平行して、第2号住居跡と土壌の調査を4月24日から開始し、4月26日に終了させた。

また、4月20日から縄文時代の包含層出土遺物のドット処理を行い、4月26日に終了した。

全ての遺構の調査が終了した後に、調査区全体を清掃し、4月27日に全体撮影を行い、発掘現場での作業を全て終了した。

4月28日に機材等を撤収し、全ての発掘調査作業を終了した。

(2) 報告書作成作業

報告書の作成作業は、平成8年4月1日から平成8年5月31日にかけて行った。

4月上旬から遺物の洗浄・注記を行い、4月中旬には接合・復元を開始する。

遺物の処理と平行して、図面整理も開始する。

4月下旬には、第1号住居跡出土遺物の復元をほぼ終了し、グリッド出土の縄文土器の接合を開始する。

5月の初旬には、縄文土器の接合復元を終了し、拓本採りを開始する。また、同時に、第1号住居跡出土の平安時代の遺物の実測を始め、トレースを行い、写真撮影を行う。

5月の中旬には遺構と遺物の版組みを行い、全体の割り付けを行いながら、文章の執筆を開始した。

5月下旬に校正等を行い、5月31日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成7年度）

理事長	荒井 桂
副理事長	富田真也
専務理事	吉川國男
常務理事兼管理部長	荒井秀直
理事兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	及川孝之
主 査	市川有三
主 任	長滝美智子
主 事	菊地 久
経 理 課 長	関野栄一
主 任	江田和美 福田昭美 腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	高橋一夫
調査第四課長	酒井清治
主任調査員	金子直行 石坂俊郎

(2) 整理作業（平成8年度）

理事長	荒井 桂
副理事長	富田真也
(兼)専務理事	吉川國男
常務理事兼管理部長	稲葉文夫
理事兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	依田 透
主 査	西沢信行
主 任	長滝美智子
主 事	菊池 久
経 理 課 長	関野栄一
主 任	江田和美 福田昭美 腰塚雄二
資料部	
資料部長	梅沢太久夫
主幹兼資料部副部長	谷井 彪
専門調査員兼 資料整理第一課長	今泉泰之
主任調査員	金子直行

II. 遺跡の立地と環境

大山遺跡は、埼玉県北足立郡伊奈町大字小室字大山818番地他に所在し、高崎線上尾駅と宇都宮線蓮田駅とのほぼ中間地点に位置し、上尾駅から東北東約3kmの地点に位置する。

遺跡は鴻巣付近に端を発するいわゆる大宮台地のほぼ中央部に位置し、綾瀬川とそれに流れ込む落し堀とに挟まれて開析された小室支台西側の先端部に立地している。遺跡の乗る台地は標高14m前後を測り、今回の調査区はその台地肩部にあたり、現在の水田面からの比高差は4～5mを測る。

大山遺跡の存在する小室支台は、南東方向に張り出した茄子状の形状を示し、綾瀬川方面に張り出す舌状台地と、それに組み合う樹枝状小谷が発達するが、沖積化の影響で大半の谷筋は埋没が進み、比高差の小さい比較的なだらかな景観を持つ台地が続いている。遺跡はこの緩やかな台地の縁辺部に形成されており、大きく分けると大山遺跡周辺の小室地区と、綾瀬川に面した東側台地縁辺部と、北部で台地の入り組む大針・

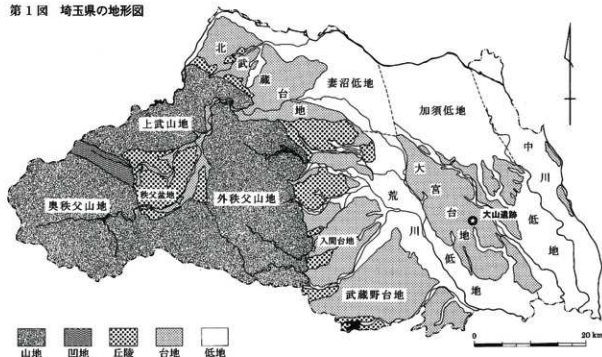
羽貫地区に集中する傾向がある。

伊奈町は近年の開発における人口増とともに東北・上越両幹線の建設や、伊奈新都心計画による開発によって、多くの遺跡が調査されてきた。しかし、以前から大山遺跡を始めとして、埼玉県の考古学の研究史上において重要な位置を占める遺跡が数多く調査されてきており、周辺には学史上著名な遺跡も多く存在している。

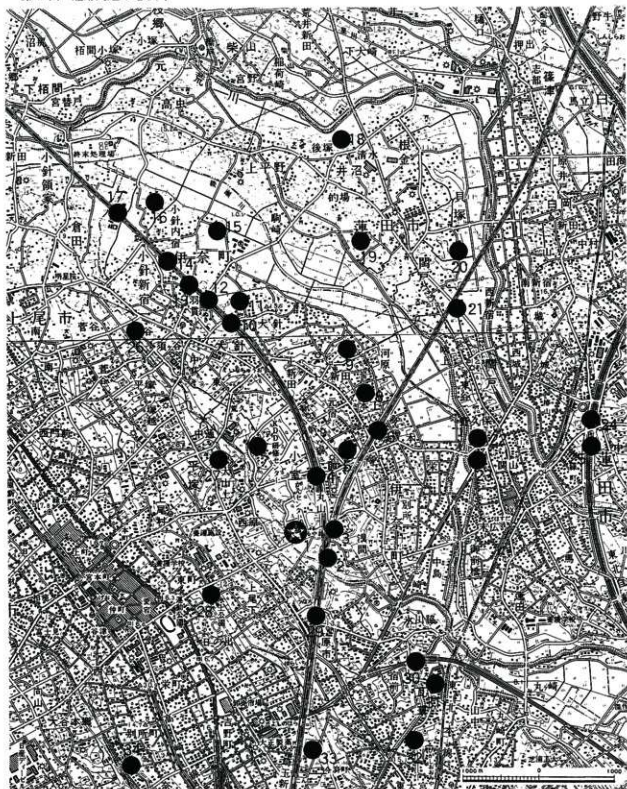
特に、綾瀬川流域は貝塚の集中する地域であり、古くから考古学的に注目されてきた地域である。綾瀬川の左岸の蓮田市では縄文時代前期の関山式、黒浜式のタイプサイトである関山貝塚や黒浜貝塚群が存在し、右岸の伊奈町では、最奥に位置すると言われていた県指定遺跡縄文前期小貝貝塚よりも、さらに奥に位置する大針貝塚が発見され、学術調査が行われている。その結果、大針貝塚は前期関山式の貝塚であることが明かとなった。

小室地区で最も大きな調査が行われているのは大山

第1図 埼玉県の地形図



第2図 遺跡周辺の地形図



遺跡地名表

1. 大山遺跡 2. 伊奈氏屋敷跡 3. 赤羽遺跡 4. 丸山遺跡 5. 志久遺跡 6. 久保山遺跡 7. 小室天神前遺跡 8. 水川神社裏遺跡
9. 小貝戸貝塚 10. 北遺跡 11. 大針貝塚 12. 原遺跡 13. 八幡谷遺跡 14. 相野谷遺跡 15. 戸崎前遺跡 16. 栗師堂原遺跡 17. 向原遺跡
18. 井沼遺跡 19. 上間戸貝塚 20. 越瀬貝塚 21. 間戸足利遺跡 22. 間山貝塚 23. 板堂貝塚 24. 炭釜屋敷貝塚 25. 密上貝塚 26. 菅谷北城
27. 平塚水川遺跡 28. 東町二丁目遺跡 29. 十二番耕地道跡 30. 秩父山遺跡 31. 尾山台遺跡 32. 東北原遺跡 33. 今羽丸山遺跡
34. 奈良瀬戸遺跡

遺跡であり、大山遺跡は旧石器時代から縄文時代中期、古墳時代、平安時代の複合遺跡であることが明らかにされてきた。特に、縄文時代中期の集落は、加曾利EⅠ～EⅢ式にかけての集落ではほぼ全貌が明らかにされている。また、平安時代では製鉄遺構のたたらが検出され、それらに関係する集落も発見された。

大山遺跡東側の谷をはさんだ対岸には、県指定「伊奈氏屋敷跡」が存在し、屋敷の乗る台地の裾の部分が新幹線の路線にかかるため、伊奈氏屋敷跡からやや北側の丸山遺跡にかけて発掘調査が行われた。その結果縄文時代後・晩期の土器片と共に、伊奈氏屋敷跡からは丸木船2艘と、櫂や塗りの弓や櫓が出土し、湿地遺跡ならではの豊富な情報が得られている。

大山遺跡の乗る台地の基部付近には志久遺跡が存在し、縄文中期加曾利EⅡ～Ⅲ式、後期称名寺式期の集落跡が検出されている。また、志久遺跡の西方の台地縁辺部には小室天神前遺跡が位置し、志久遺跡と同様に加曾利EⅡ～Ⅲ式、称名寺式、弥生終末から古墳初期の集落跡が調査されている。

東側台地縁辺部では、大針地区と小室地区のほぼ中央部に県指定の縄文前期小貝戸貝塚があり、その南方約500mの地点に氷川神社遺跡が存在し、後・晩期の土器群が出土している。また、この地域では東北新幹線の関係で大久保山遺跡が調査されており、旧石器時代の石器集中区と、縄文時代早期の炉穴群や中期加曾利EⅠ～Ⅲ式の集落と、後期の土壌が検出されている。

伊奈町北部の大針・羽貫地区では上越新幹線関係で北遺跡と原遺跡、福川市境の向山遺跡が調査されている。北遺跡は綾瀬川方向に張り出した舌状台地上に形成された縄文中期の大集落であり、勝坂式から加曾利EⅡ式にかけての住居跡が72軒検出されており、谷を挟んだ北側の対岸にはほぼ同時期の原遺跡が存在する。原遺跡は新幹線関係の発掘では、中期勝坂末から加曾利EⅡ式期にかけての住居跡15軒が検出された。そして、近年、伊奈新都市計画の関連で同じ遺跡の隣接地を発掘調査しており、さらに中期の住居跡が重複しながら約70軒前後検出されている。

北遺跡と原遺跡は谷を隔てただけの位置関係にあり、同じ中期の大きな集落となっているが、その細かな时期的な関係を見ると、勝坂式の中段階では両遺跡とも住居跡は少なく、勝坂終末から加曾利EⅡ式古段階にかけては北遺跡の方が住居跡が充実しており、加曾利EⅡ式新段階からEⅢ式にかけては原遺跡の方が、EⅢ式新段階では北遺跡が、EⅢ式新段階では原遺跡の方が内容に充実したのが見られる。両遺跡を合わせると、この周辺地域における中心的な遺跡で拠点的な性格が考えられるが、テリトリーや母村分村といった関係等から大きな問題を投げかけているものと思われる。他の遺跡が、住居跡数の少ない小さな集落が多い点も関係してこよう。

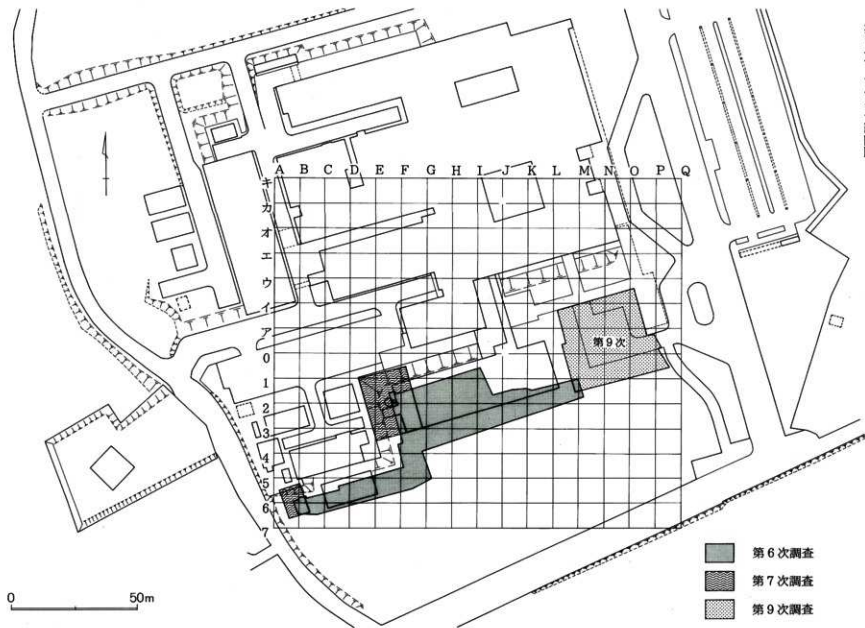
さらに、伊奈新都市開発関連の調査では、羽貫地区において大きな成果が得られている。新幹線関連で調査された向山遺跡では、古墳時代初期の集落と方形周溝墓が検出されていたが、それに加えて大型の良好な方形周溝墓と、住居跡が発掘されている。また、旧石器時代では第2黒色帯の下部から石器群が出土している。また、戸崎前遺跡では、中期の加曾利EⅡ式と後期の堀之内式期の集落が発掘されており、前期埴山式の住居跡も1軒検出されている。

また、大山遺跡周辺の市町村では、綾瀬川下流の北遺跡と同様な舌状台地上に上尾市秩父山遺跡が存在し、中期の大きな集落が形成されている。北遺跡との比較において、同様な立地条件や大集落相互間の距離及びテリトリーといった関連から、この地域における中期集落の在り方の一端を窺い知ることができる。

さらに、上尾市原市の十二番耕地遺跡からは、草創期の隆起線文系土器を始めとして、瓜形文系土器、多縄文系土器等が出土しており、貴重な資料を提供している。

この様に、伊奈町の小室支台を含む大宮台地の縁辺部は、各時期、各時代を通じて遺跡の宝庫であったことが理解されるのであり、今後の発掘調査の増加によって、より地域相、時代相が明らかにされてくるものと期待される地域なのである。

第3図 ケリマキ配線図



Ⅲ. 第9次調査の概要

大山遺跡の第9次調査は平成7年4月1日から平成7年4月30日までの、約1ヵ月の期間に亘って実施された。

今回の調査区は、正門から入ったところの左手に位置する林の部分から正面玄関にかけての箇所で、大半が駐車場になっていた部分であった。

発掘調査は重機によって表土を剥くことから開始されたが、駐車場として造成されていた場所は、ローム付近の深さまで駐車場の基礎工事が及んでおり、地表からおよそ60cm程の厚さで砂利がびっしりと敷き詰められていた。

その結果、この砂利を除去するのに予想以上に手間がかかり、さらに、砂利混じりの廃土置き場が遠い場所であったために、調査面積の割には表土除去に日数がかかってしまった。

駐車場の基礎部分を除去して、精査したところ、基礎による攪乱がおよそソフトロームまで及んでおり、部分的にはハードローム内にまで及んでいることが確認された。特に、調査区北側の正面玄関付近は攪乱の深度が深く、調査の対称に成り得ないことが把握された。

また、林の中に位置する調査区域は、表土除去等は容易であったが、植樹のために厚く客土されており、遺構確認面まで60~80cmの表土が存在していた。

表土除去を進行するにつれて、縄文土器等の破片が出土し始めたが、土の色が攪乱土であり、さらに下げることにして、およそソフトローム面で遺構確認を行うことにした。

精査後、遺構確認作業を行うと、遺構と思われていた黒褐色の落ち込みは殆どが植樹による攪乱であることが明かとなってきた。そして、攪乱を受けていないプライマリーな部分がおよそ面積の半々程度しか残っていないことが明かとなってきた。

さらに、調査区の東側では第1次調査の調査範囲が確認され、西側では第6次調査の範囲が確認されるに

至った。

精査の結果、最終的には住居跡2軒と土壇2基が確認され、その他、縄文時代の包含層が確認された。

調査は、グリッド方式を採用した。グリッドは第6次調査区のグリッドを基本にして、延長する方針を採った。その結果、第6次から第9次調査区が同一グリッドで処理されることとなり、相互の関連性が明白となったが、基本となる第1次調査区との関係は、センター内の敷地面積上において参照されるのみで、厳密な意味で対応しているものではない。

グリッドは国土標準平面直角座標第Ⅱ系に基づいて一辺10mのメッシュを切り、大グリッドを設定した。大グリッド内には一辺2mの小グリッドを25個設定し、調査はこの小グリッドを基準にして行った。

第6次調査で設定したグリッドは、調査区のおおむね中央までしかカバーしていないため、新たに北方向にA~Oまでのグリッドを増設した。また、東方向へはN~Pを増設した。

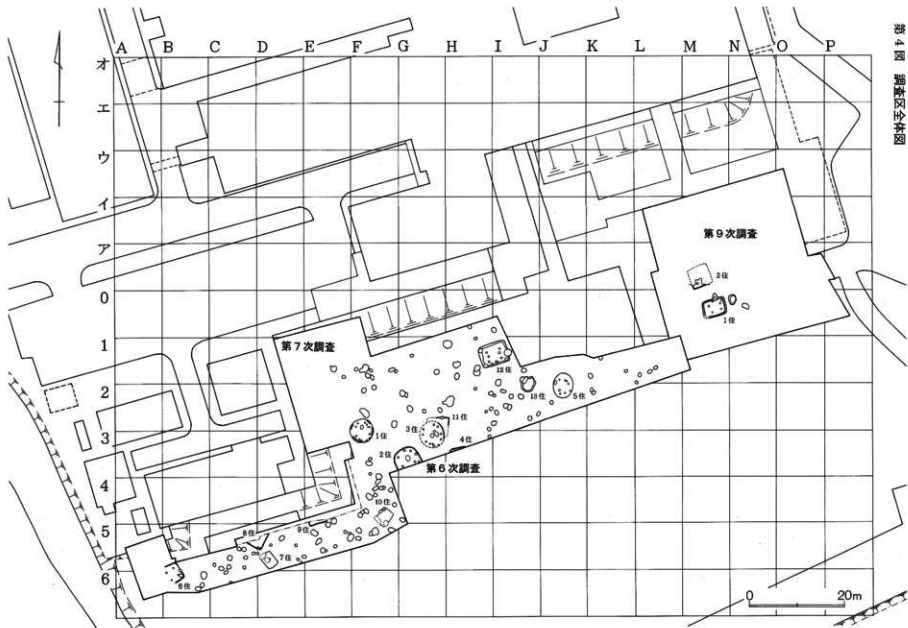
今回検出された遺構は、M・N-A・0区に集中しており、縄文の包含層はM・N-1区に辛うじて検出されたのみであった。

当初、第1次調査区と第6次調査区に挟まれているため、縄文時代の住居跡と、平安時代の住居跡が数軒検出されるものと思われたが、平安時代の住居跡1軒と、おそらく古墳時代前期の住居跡になると思われる住居跡が1軒検出された。他に、縄文時代中期の土壇2基と、縄文時代中期と晩期の包含層が、僅かではあるが検出された。

平安時代の住居跡の覆土からは、須恵器の坏と甕を中心として、少量の土師器が出土しており、竈からは土師器の甕が押し潰された状態で出土した。出土した遺物から、9世紀代の年代が与えられる。

縄文土器は、中期の加曾利E式を主体としており、晩期の土器群は安行3c式を中心とするものであった。

第4図 調査区全体図



IV. 発見された遺構と遺物

1. 住居跡

第1号住居跡(第5図～第7図)

M-0区に位置する。住居跡の形態は長軸を東西方向に採る長方形のプランで、長軸4.96m×短軸3.72m×深さ0.62mであった。

北壁中央部の東よりに竈が存在しており、竈を通る主軸はN-15°-Eであった。

住居跡は長方形のプランであるが、西壁がやや広い台形状を呈しており、南西コーナーに攪乱を受けていた。北東のコーナーには長径0.58m×短径0.54m×深さ0.16mの貯蔵穴が存在しており、壁溝は貯蔵穴の存在する北東コーナーを除いて、全周していた。壁溝の幅は広いところで0.24m、狭いところで0.16m、深さは平均的に0.05m程であった。

柱穴は4本が確認された。4本の柱穴の配置は、全体的にやや東に寄っており、間隔は南北方向のP1とP2の間が1.5m、P4とP3の間が1.40mで、東西方向のP1とP4の間が2.30m、P2とP3の間が2.20mを測る。柱穴の深さはP1=0.25m、P2=0.18m、P3=0.16m、P4=0.21mである。

竈の焼き口部からP1、P4の間にかけて大きく攪乱を受けているが、床面は中央部にかけて若干くぼむ皿状を呈しており、中央部は硬化面が見られ、壁周辺にかけては柔らかい面へと移行していた。

住居跡の覆土は上部においては通常の自然堆積が見られたが、第3層においては焼土や炭化物が多く混在しており、焼土はブロック状を呈する部分もあり、投棄された様な状態を呈していた。

竈は壁外に大きく張り出すもので、潰れた状態で検出された。竈内には土師器の甕が潰された状態で出土しており、甕は二次焼成によって脆く、赤色化していた。

遺物は殆どが覆土中より出土しており、須恵器の坏、甕、土師器の甕を主体とするが、縄文土器や石器等も混在しており、これ等の破片は取り除き、グリッド出

土遺物として扱った。

1はほぼ完形の須恵器の坏である。底部は回転糸切り無調整である。体部の立ち上がりは中程でやや膨らみ、口縁部は外側に反る。胎土は白色針状物質をたいへん多く含み、砂粒はわずかに含まない。焼成は良好で、灰色を呈する。口径は12.5cm、底径は6.7cm、器高は3.6cmである。

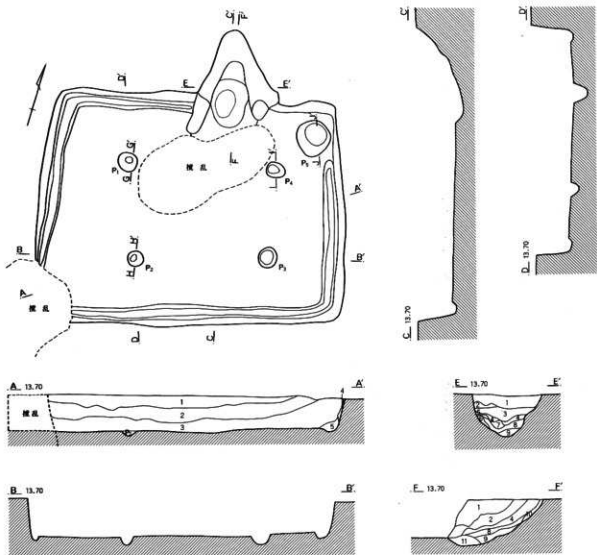
2は口縁部～体部を三分の一ほど欠損する須恵器の坏である。底部は回転糸切り無調整である。体部の立ち上がりは直線的で、口縁部近くで若干影らんだ後、外側に反る。胎土は白色針状物質を多く含み、径2mm前後の小石をわずかに含む。焼成は良好で、灰色を呈する。口径は12.5cm、底径は7.2cm、器高は3.7cmである。見込み部分は磨耗しており、転用視の可能性もある。

3は須恵器の坏で、底部は六分の一ほど欠損し、口縁部は五分の一ほどしか残っていない。底部は回転糸切り無調整である。体部の立ち上がりは中程でやや膨らみ、口縁部は外側に反る。胎土は砂粒と白色粒子をごくわずかに含む。焼成は良好で、灰白色を呈し、一部灰褐色がかっている。推定口径は13cm、底径は6.7cm、器高は3.7cmである。

4は須恵器の坏で、全体の四分の一ほどしか残っていない。底部は回転糸切り無調整である。体部の立ち上がりは中程でやや膨らみ、器内は比較的厚い。胎土は白色針状物質を多く含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定口径は12cm、推定底径は7cm、器高は3.4cmである。口縁部外面に火輝痕が顕著である。

5は須恵器の坏で、底部は約半分、体部は四分の一ほどしか残っていない。底部は回転糸切り無調整である。口縁部は欠くので断言できないが、体部の立ち上がりは中程でやや膨らむと思われる。胎土はきめ細かく、径1mmほどの白色粒子を少量含み、小石をわずかに含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。推定底径は7cm

第5図 第1号住居跡



第1号住内土層

- 1層 黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子をやや多目に含む。しまり強し。
- 2層 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子を多く含む。しまりやや強し。
- 3層 暗褐色土 炭化物を多く含む。焼土粒子、ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗灰褐色土 ロームブロック、炭化物を多く含む。しまりやや強し。
- 5層 黄褐色土 ロームブロックを含む壁体の崩落土。

カマド内土層

- 1層 暗灰褐色土 ローム粒子、焼土粒子を多く含む。
- 2層 暗灰褐色土 ローム・焼土・炭化物粒子を多く含む。
- 3層 暗灰褐色土 ロームブロックと、焼土粒子を多く含む。
- 4層 暗灰褐色土 焼土ブロック多く含む。
- 5層 赤褐色土 焼土を多量に含む。
- 6層 赤褐色土 焼土ブロックとロームブロックを多く含む。
- 7層 暗灰褐色土 焼土粒、炭化物粒多く含む。
- 8層 暗灰褐色土 焼土ブロックを多く含む。しまり弱し。
- 9層 赤褐色土 焼土粒、焼土ブロックを多量に含む。
- 10層 赤褐色土 ローム土 焼土粒まごる。
- 11層 暗灰褐色土 ローム粒、焼土粒多く含む。

G_{13.70} G'



H_{13.20} H'



I_{13.20} I'



J_{13.20} J'

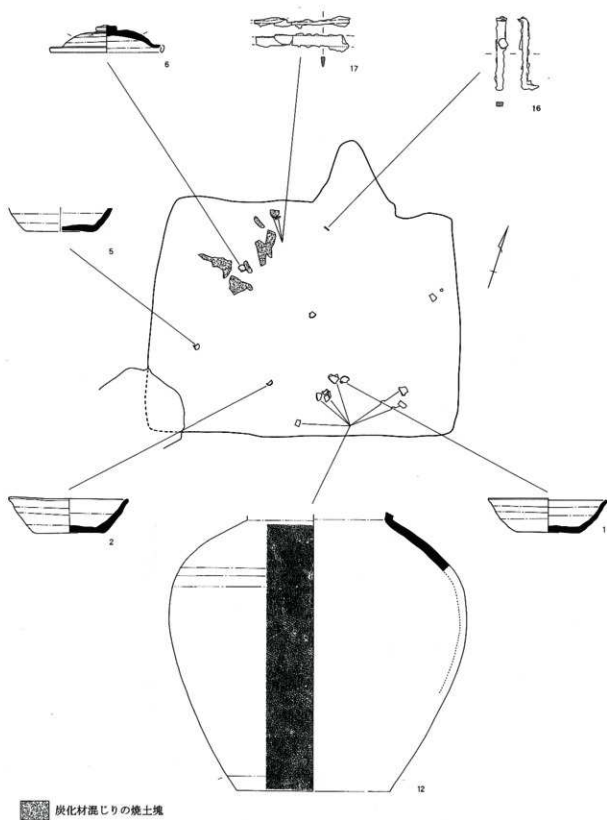


P1~5内土層

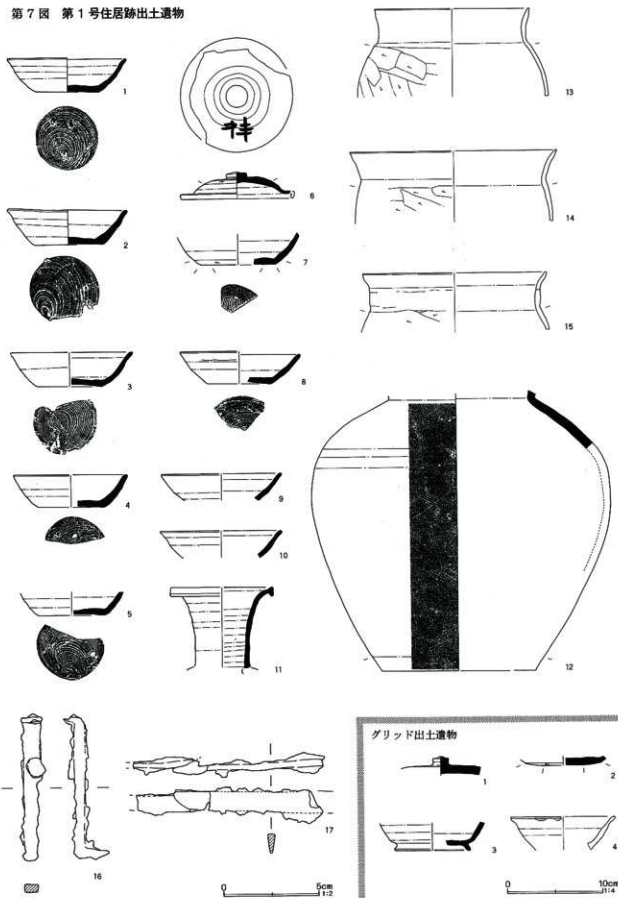
- 1層 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を多く含む。
- 2層 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 3層 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を多く含む。
- 4層 暗灰褐色土 ロームブロックを多く含む。

0 2m
1:50

第6図 第1号住居跡遺物分布



第7図 第1号住居跡出土遺物



である。見込み部分は磨耗しており、薄く黒色がかっているところもあるので転用碗の可能性が高い。

6は小振りの須恵器の蓋で、口縁部を二分の一ほど欠損する。天井部は回転へら削り調整した後、つまみを付けている。胎土は砂粒と白色粒子を多く含む、径2~4mmの小石を少量含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定口径は11.8cm、器高は2.8cm、つまみ径は2.2cmである。外面に墨書があり、「卍」の異体字と思われる。ただし、墨が薄くなっており、2文字として読むことも可能である。その場合は「卍卍」=「三十万」と読める。

7は須恵器の椀で、五分の一ほどの破片である。底部は回転糸切り後、外周を回転へら削り調整されている。また、回転へら削り調整は体部下端にも及んでいる。胎土は白色針状物質と白色粒子をたいへん多く含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定底径は8cmである。

8は須恵器の椀で、四分の一ほどの破片である。体部の立ち上がりは中程でやや膨らみ、口縁部はあまり外側に反らない。底部は回転糸切り無調整である。胎土は砂粒と白色粒子と径3mmほどの小石をわずかに含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定口径は12.8cmで、推定底径は6.6cm、器高は3.1~3.4cmである。全体にゆがんでおり、口縁部外面は粘土紐の巻き上げ痕が観察できる。

9は須恵器の椀で、口縁部四分の一ほどの破片である。体部の立ち上がりは中程でやや膨らみ、口縁部はあまり外側に反らない。胎土は白色粒子と径1mmほどの小石をやや多く含む。焼成は良好で灰色を呈する。推定口径は12.8cmである。

10は須恵器の椀で、口縁部四分の一ほどの破片である。体部の立ち上がりは中程でやや膨らみ、口縁部は外側に反る。胎土は白色粒子を少量含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定口径は13.0cmである。

11は須恵器の長頸壺の口縁部で、三分の一ほどの破片である。成形時の指の押さえの痕が内外面ともに著しい。胎土は白色針状物質を多く含む、砂粒と白色粒

子を少量含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定口径は11cmである。

12は須恵器の壺である。口縁部が欠損し、さらに胴部を四分の一、底部を三分の一ほど欠損する。最大径は胴部中位よりやや上にあり、肩の張りは比較的緩やかである。胴部下半は外面を叩き、肩部は横ナデ時の指の押さえの痕が顕著である。内面は当具痕が所々観察できるが、最後にへら状の工具でなでて仕上げている。当て具には青海波文はみられない。底部は手持ちへら削り調整され、胴部下端にも及んでいる。胎土は白色針状物質をやや多く含む、白色粒子と径3~5mmの小石を多く含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定底径は16.4cmである。肩部外面には灰白色の降灰釉がかかるが、風化が著しい。

13は土師器の台付き甕と推定される。口縁部~胴部上半の五分の一ほどの破片である。口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部は丸く張る。口縁部は横なで、胴部はへら削り整形される。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。推定口径は16.6cmである。

14は口縁部「く」の字形態の土師器の甕で、八分の一ほどの小破片である。口縁部は横なで、胴部上半はへら削り整形される。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、橙色を呈する。推定口径は22cmである。

15は口縁部「コ」の字形態の土師器の甕で、五分の一ほどの破片である。口縁部は横なで、胴部上半はへら削り整形される。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、橙色を呈する。推定口径は19.6cmである。

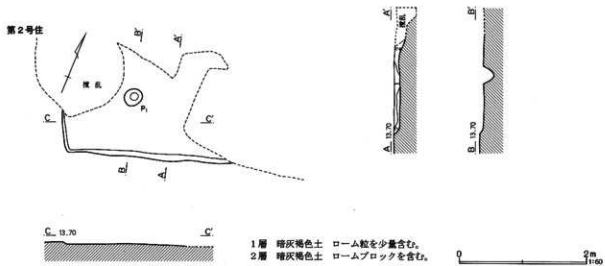
16は鉄釘である。頭を折り曲げて作り出し、断面は方形である。先端部分が折れているが、前長は約9cmある。錆が進んでいるが、残りが比較的良い。

17は2点の鉄製品が錆により付着した状態である。そのうちの1点は刀子である。刀子の切っ先にもう1点が付着しており、同一個体の中子の可能性もある。錆が進んでおり、層状に剥離が進んでいる。

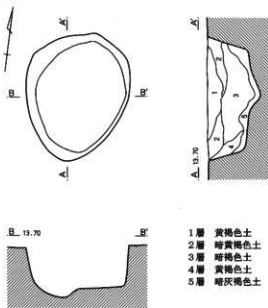
第2号住居跡(第8図)

M-A区に位置する。大半が攪乱を受けており、南

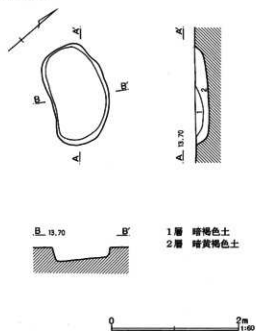
第8図 第2号住居跡と土壌



第1号土壌



第2号土壌



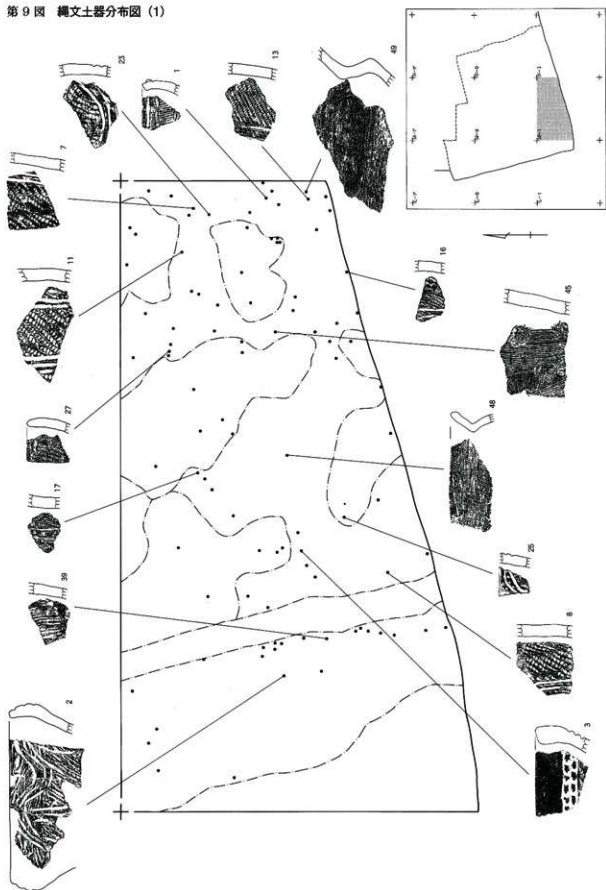
西のコーナーの一部と、柱穴1本のみ検出された。褐色の覆土を持ち、床面まで約0.09mを測る。

柱穴は壁から約0.9m程離れたところに存在し、深

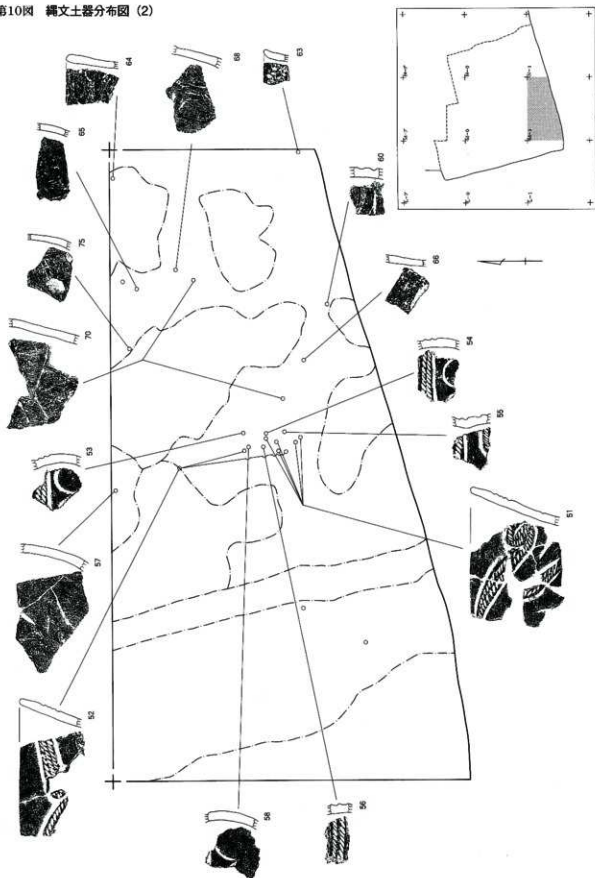
さ0.18mであった。

壁溝も無く、遺物も出土していないが、住居跡の形態と覆土から、古墳時代の住居跡と推測された。

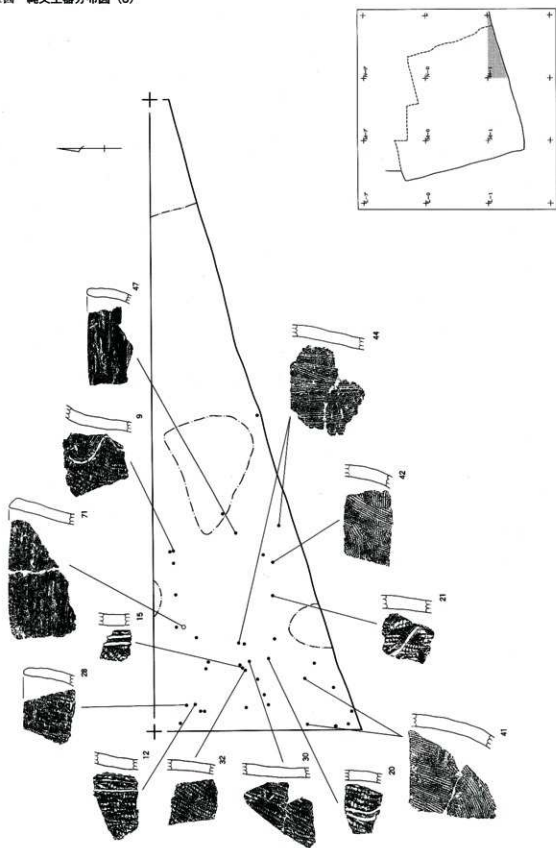
第9図 縄文土器分布図(1)



第10图 縄文土器分布图 (2)



第11圖 縄文土器分布圖 (3)



2. 土壌

土壌状の落ち込みは多数検出されたが、明らかに攪乱以外の遺構においても、木の根跡状の呈するものや、底面に凹凸のがられるもの等、土壌として認定されないものが大半を占めていた。覆土の状態から、土壌と認定されるものは2基存在した。

第1号土壌 (第8図)

N-0区で、第1号住居跡北東コーナーに隣接して存在する。形状は不正桁円形を呈し、長径2.08m×短径1.67m×深さ0.71mであった。主軸はN-19°-Eであった。

覆土は5層に分層でき、第1層は焼土粒子・炭化物を多く含む黄褐色土である。第2層は第1層よりも色調が暗い暗黄褐色土で、焼土粒子・炭化物の含まれる割合が第1層より低くなる。第3層は褐色土ブロックを多く含む暗褐色土で、焼土粒子・炭化物を若干含む。第4層は壁体の崩落土を含む層で、ロームブロックを

多く含む黄褐色土である。第5層はロームブロックと暗褐色土ブロックを多く含む暗黄褐色土で、しまりは強いが、粘性に欠ける土である。

覆土中より、縄文時代中期の土器片と小礫が多く出土しており、縄文時代中期の所産と判断される。遺物は細片のため、図示し得なかった。

第2号土壌 (第8図)

N-0区で、第1号土壌の南東側に存在する。形状は不正長楕円形を呈し、長径1.68m×短径0.96m×深さ0.26mであった。主軸はN-62°-Wであった。

覆土は2層に分層でき、第1層は焼土粒子・炭化物を若干含む暗褐色土である。第2層はローム粒子を多量に含む暗黄褐色土で、しまり、粘性共に強い。

覆土中より、縄文時代中期の土器片が出土しており、第1号土壌と同様に、縄文時代中期の所産と思われる。遺物はやほり細片で、図示し得なかった。

3. グリッド出土遺物

グリッドからは、縄文時代の土器片と平安時代の土師器、須恵器の破片が出土している。縄文土器は攪乱の中や、包含層から出土しているが、M-1～N-1区にかけての包含層から出土するものに関してはドット処理を施しており、他の地区ではドット処理の対象となる遺物は殆ど出土していない。平安時代の遺物も、攪乱内からの出土であった。

縄文土器 (第9図～第13図)

第9図～第11図に遺物出土状況図を掲載した。第9図は、M-1区出土の中期土器群の分布図である。第10図はM-1区出土の晩期土器群の分布図である。第11図はN-1区出土の中期と晩期の土器群の分布図であるが、晩期の土器片は1点のみである。この分布状況から理解される様に、中期の土器群は広い分布域を持つが、晩期の土器群は比較的限られた範囲に分布していたことが理解される。

特に、M-1区中央部における晩期土器群の分布の集中は、遺構の存在を彷彿させるが、精査の結果、遺

構の存在は確認されなかった。

以下、土器群を分類毎に説明していきたい。

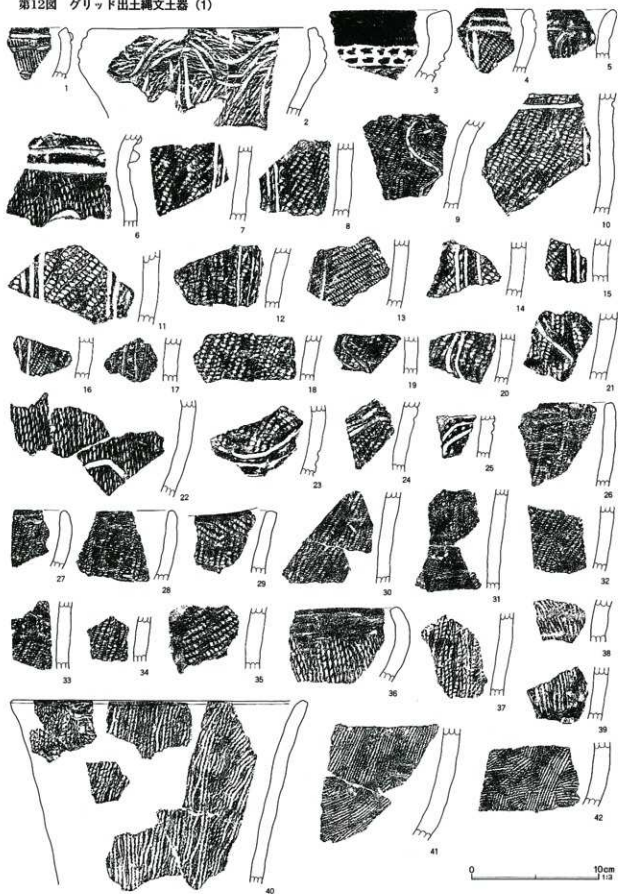
第I群土器 (第12図、第13図43～50)

中期の土器群を一括する。

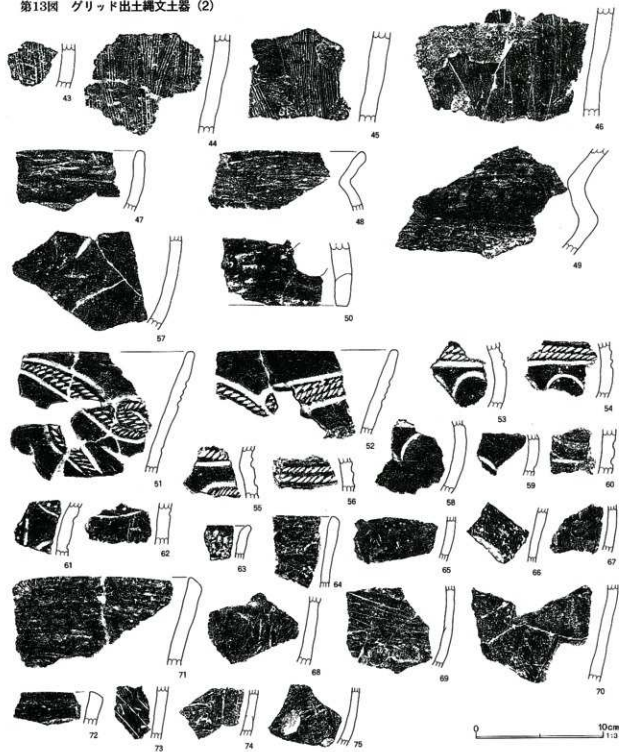
1はキャリバー形の口縁部文様帯を持つ深鉢形土器で、地文に条線文を施した後、隆帯を巡らせて口縁部文様帯を区画している。区画隆帯の幅は、やや深めの沈線文が施文されており、加曾利E I式に比定されるものと思われる。

6は頸部括れ、胴部がやや張る器形を呈し、隆帯で文様帯を区画している。口縁部文様帯には隆帯文の渦巻き文を基調とするモチーフが施文されるものと思われる。胴部にはやや太い沈線文で、曲線モチーフが施文されている。地文は燃糸文Lが施文されており、加曾利E I式に比定されるものと思われるが、胴部モチーフが連弧文であるとなると、E II式に比定される可能性がある。連弧文系土器であるならば、器形や口縁部文様帯の在り方が不自然であり、頸部の区画に隆帯

第12図 グリッド出土縄文土器 (1)



第13図 グリッド出土縄文土器 (2)



文を使用する点も、あまり例のないものと言えよう。

2は口縁部が内彎しながら開くキャリバー形を呈し、口縁部に連弧文を、胴部に懸垂文を施文する連弧文系土器である。口縁部の連弧文は3本沈線で施文され、連弧文も3本沈線文抽出を基本としている。連弧文間や懸垂文間は磨り消されない。地文は燃糸文Lを口縁部で横位に、胴部で縦位に施文する。連弧文のモチーフが、口縁部文様帯のモチーフと化している。加曾利EⅡ式段階の連弧文土器と思われる。

3はやや肥厚する無文の口縁部が内彎しながら開く器形を呈し、2列の結節沈線文で口縁部が区画されている。区画線下には単節縄文RLが施文されており、沈線の懸垂文が垂下するものと思われる。

4、5は口縁部が沈線文で区画され、口縁部から懸垂文が垂下する土器群である。4は口縁部がやや内彎気味に開く器形で、地文に単節縄文RLが施文される。5は口縁部が開く器形で、植物の茎状の浅い沈線文で口縁部を区画し、蛇行の懸垂文を垂下させるものである。地文には燃糸文Lを施文している。3～5は曾利式系の要素が強い土器群である。

7～25は沈線文が施文される胴部破片である。7～9、11～21は沈線文の懸垂文が垂下する加曾利E式キャリバー系深鉢土器の胴部破片と思われる。3本を基本とする沈線懸垂文と、2本対の蛇行沈線懸垂文が組み合わさっているものが多い。縄文原形は殆どのものが単節RLである。9は多条縄文の可能性がある。22～25は連弧文系土器の胴部破片と思われるものを一括した。22は燃糸文を施文するもので、やや間隔の開いた2本沈線文で連弧モチーフを描いている。他は、平行沈線文で連弧文を描き、地文に単節RL縄文を施文している。

26～46は地文のみの土器群を一括する。26～35は縄文のみ施文されるものである。26～28、30～34は同一個体と思われ、口縁部がやや内彎気味に開く器形を呈し、口縁部付近ではやや縦走する縄文を、胴部で斜行する縄文を、0段多条縄文単節RLの縦位回転施文で表している。

29は波状の角頭状口縁が開く器形を呈し、口縁部では1段横位に、以下縦位に単節縄文RLを施文している。35は復節RLRが縦位に施文される。

36～42は燃糸文のみ施文されるものである。36は内彎して開く口縁部に無文部を設定して、以下燃糸文Lを施文している。40は口縁部が直線的に開く深鉢形土器で、口唇部直下から燃糸文Lを施文している。41、42は細かな燃糸文Lを、方向を変えながら施文するものである。

43～46は条線文を施文するもので、細かな条線文を比較的密に施文するが、45はやや間隔が開き、46は擦痕状の条線文が粗く施文されている。

47は鉢状の無文土器で、49は胴部が「く」字状に屈曲する無文の浅鉢である。50は円孔の透かしがある無文の器台である。48は口縁部の屈曲する浅鉢と思われるが、やや器壁が薄く、晩期の甕形土器になる可能性もある。

第Ⅱ群土器（第13図51～75）

晩期の土器群を一括する。

51～59は同一個体と思われる破片である。口縁部が直線的に開き、頸部で括れ、胴部が張る器形を呈する深鉢形土器で、口縁部には入り組み状の三叉文が施文され、2～3列の刺突列が充填されている。胴部の区画線下は単沈線の弧線文が施文されている。61、62は細沈線区画内に刺突文が施されている。いずれも安行3c式に比定される。

63～75は無文土器である。63～70はやや器壁の薄い土器で、灰白色を呈し、擦痕状の整形が施される。71、72は同一個体で、51同様の器形を呈するものと思われ、口唇部外削状を呈する。いずれも安行3c式に伴う無文土器と思われる。

平安時代の遺物（第7図1～4）

平安時代の遺物は須恵器の坏、甕の破片と、土師器の甕の破片であった。因化可能なものは4点のみであった。

1は須恵器の蓋で、天井部の破片である。つまみは

小さく、天井部は平たい。外面は回転へら削り調整した後につまみが付けられている。胎土は白色針状物質を多く含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

2は須恵器の坏で、底部五分の一ほどの小破片である。底部は回転糸切り後、外周を回転へら削り調整されている。胎土は白色針状物質を多く含む。焼成は良好で、灰色を呈する。推定底径は8cmである。外面に火禱痕が顕著である。

3は須恵器の高台付き椀で、底部付近三分の一ほど

の破片である。胎土は白色針状物質を多く含む、白色粒子と径2mmほどの小石を少量含む。焼成は良好で、青灰色を呈する。

4は土師質土器の小皿で、五分の一ほどの破片である。体部の立ち上がりは比較的直線的で、口縁部は外側に反る。胎土は砂粒と赤色粒子を少量含む。焼成は良好で、橙色を呈する。推定口径は11cmである。口唇部に油煙痕がみられる。底部から立ち上がる変換点で破損している破片と思われる。

V. 発掘調査の成果と課題

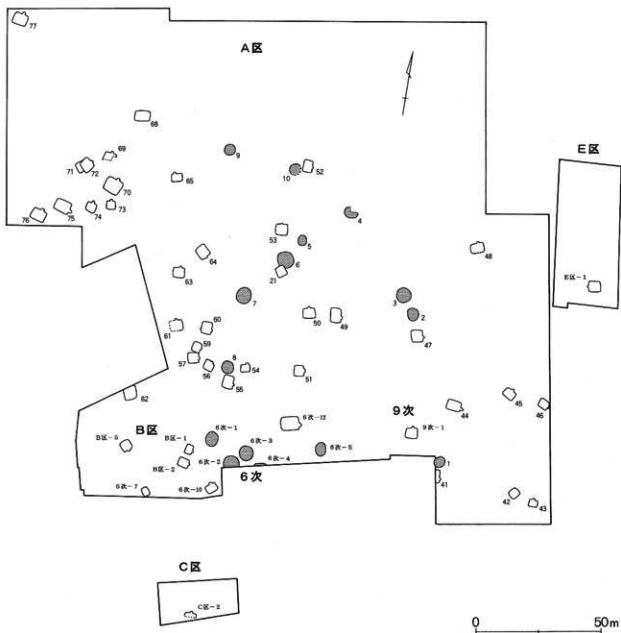
1. 縄文土器について

大山遺跡は今までに8次に亘って発掘調査が実施されており、縄文時代の大方の様相についても把握がなされてきた。その結果、大山遺跡全体からは縄文時代各時期の土器群が出土しており、特に中期後半の集落については大半が明らかにされてきた。

大山遺跡について最も大きな調査が行われたのは第

1次調査であり、A区からI区にまたがって各時期の土器群が出土している。各地点毎に出土土器の傾向が異なる等、時期的な細かな相違が見られるが、一括し大山遺跡包含層出土土器として扱い概括して置きたい。第15図に代表的なものを図示した。

第14図 縄文時代・平安時代住居跡配置図



第I群土器 (第15図1~21)

早期の土器群を一括する。早期の土器群は各地点から少数出土しており、燃糸文系土器群と条痕文系土器群が大半を占める。1~13は燃糸文系土器群で、口縁部に段状の整形が施されたり、口唇部が肥厚して比較的密な縄文を施文する等、夏島式から稲荷台式の特徴を備えているものが多い(1~5、7)が、概ね夏島式新段階に位置付けられるものである。6は口唇部の肥厚しない角頭状口縁部で、斜縄文を施すものでありやや趣を異にするが、口縁部の造り等から夏島式に比定されるものと思われる。

また、8~10は口縁部に沈線が巡り、胴部に刺突文が施される疑似燃糸文土器で、稲荷原式の新段階に位置付けられる土器である。

11~13は貝殻沈線文系土器群で、田戸上層式に比定されるものと思われ、11は横位の貝殻復縁文が平行に施されている。12、13は織線を少量含み、擦痕が施されるものである。

14~21は条痕文系土器群である。14、15は条痕地文上に細線起線文をやや出隅を開けて水平に施文するもので、裏面に細かな擦痕状の条痕文を施す。16~18も細かな条痕及び擦痕状の整形を施すものであり、野島式の初頭段階に位置付けられるものである。

19~21はやや粗く明瞭な条痕文を施文するもので、19は沈線文区画内に集合沈線文を充填し、区画交点に円形刺突文を施す。鶯が島台式に比定される。

第II群土器 (第15図22~28)

前期の土器群を一括する。所謂織線土器と、織線を含まない諸磯土器が少量出土している。22はループ文の施される関山式で、23、24は斜縄文を施す黒浜式である。

25~27は浮線文上に刻みを施す諸磯b式土器であり、第8次調査では獸面把手の付いた浮線文土器も出土している。28は口縁端部を摘み、斜条線文上に刺突の施された円形浮文を貼付する諸磯c式土器である。第8次調査では細かくて粗雑な条線文地文上に、短い結節浮線文の付く、やや新しい諸磯c式が出土してい

る。

第III群土器

中期の土器群を一括する。勝坂式や阿玉台式系統の土器群が少量出土しているが、加曾利E式を中心とした中期後葉の土器群が主体を占めるため、後に集落との関係で述べることにし、ここでは説明を省略することにした。

第IV群土器 (第15図29~66)

後期前半の土器群を一括する。称名寺式、堀ノ内式、加曾利B式、曾谷式が存在する。

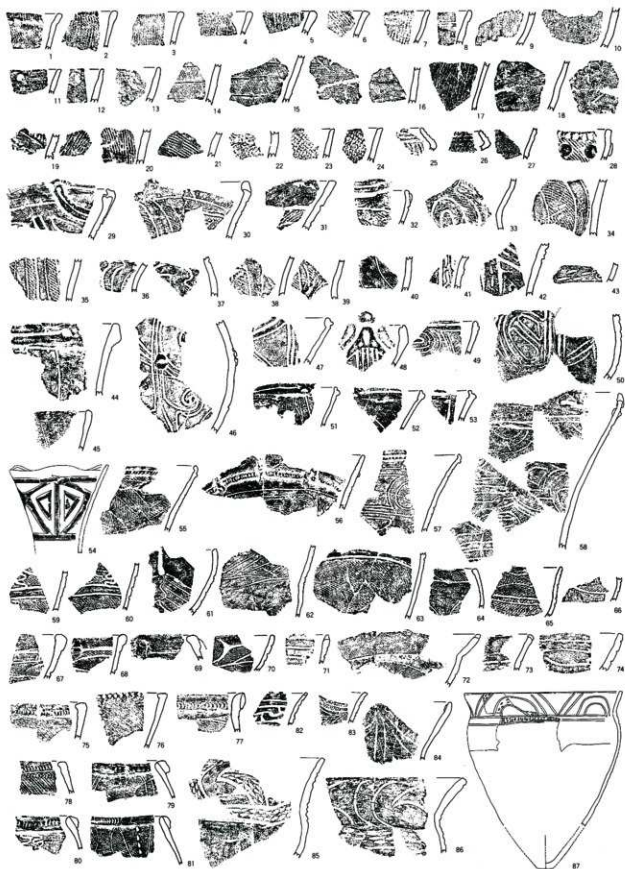
29~43は称名寺式土器であり、29~40は磨消縄文土器でおおよそ称名寺I式に、41~43は列点文を施文するII式に比定されよう。しかし、厳密には列点文を使用する段階においても縄文施文土器は存在しておりモチーフの崩れ等から新旧は判断されるべきであろう。大山遺跡出土の称名寺式土器は小破片が多く、モチーフの全体像が不明瞭であり、時期判断は難しい。33、34の比較的沈線の揃った曲線文には、その中でもやや古い様相が看取される。

区画内に列点文を施文する土器は少なく、43の横位の列点文は安行Ⅲc式の可能性もある。

44~58は堀ノ内式土器であり、44~53は堀ノ内I式、54~58は堀ノ内II式に比定されよう。44は西関東系的な土器で、口縁部の肥厚帯に押玉状の盲孔をつなく沈線文が施文されており、胴部に単位文化した縦位の沈線文モチーフが施文されている。46は胴部の張る樽形状の器形を呈し、3本単位の沈線文を基本として小さな渦巻文を連結するモチーフを描く。モチーフ上には部分的に円形の貼付文を施文する。47、48は4単位の波状口縁を呈し、波頂部から沈線文が垂下する。49~51は描出線が多条化しつつある土器群で、やや後出のである。

54~58は口縁の開く深鉢形で、幅広い文様帯を持ち、磨消縄文で幾何学的なモチーフを描く堀ノ内II式である。54は3単位の波状口縁を呈し、55~58は口縁部に隆帯が巡り、「8」状の貼付文が付く。56、58の口縁部には山形状の突起が付く。

第15図 大山遺跡出土の縄文土器



59~63は加曾利B 2式土器である。59~61は弧状に区画された磨消縄文帯に、蛇行する区切り沈線文が施文されている。62は区画内に綾杉状の沈線文を施文している。63は胴部破片であり、縄文R Lが施文されているが、区画線が明瞭で59等に類似するため加曾利B式土器に比定されよう。

64~66は口縁部から底部にかけて文様帯が多段に構成され、半円文や入り組み文が施される土器群で、曾谷式に比定される。

第V群土器（第15図67~87）

後期後半から晩期前半の安行式系土器群を一括する。67~69は帯縄文系土器群で、刻みの施される瘤が貼付される安行Ⅱ式である。70~72は三叉文が施され

る等の特徴を持つ安行Ⅲa式で、73、74は文様の区画線間に刺突文を持つもので、安行Ⅲb式に比定されよう。75~81は細線文系の土器群で、75、76は安行Ⅰ式、77、78は安行Ⅱ式、79~81は安行Ⅲa式段階に位置付けられよう。

82はやや大きめの羊歯状が施文されるもので、大洞B C式系譜の土器である。また、83、84は波状口縁に沈線文が垂下するモチーフで、姥山Ⅲ式に比定されるものである。

85~87は頸部が括れ、胴が張り、口縁部が開く器形を呈し、沈線の曲線区画内に複列の刺突文を施文するもので、安行Ⅲc式に比定され、第9次調査出土の安行Ⅲc式土器と同様な土器群である。

2. 土器群による縄文中期の集落分析

グリッド出土土器群の説明の中では中期の土器群については触れなかったが、ここでは住居跡との関連において各段階の土器群について説明を加えておきたい。

縄文中期の住居跡は現在までに14軒が発見されており、他に出土遺物の無い凹穴状遺構が2基発見されているが、構造的な変化と、土器群の変化がおおよそ対応する関係にあり、それぞれをグルーピングすることが可能となる。その分布は第14図に示したが、各段階の住居跡が中央に広場的な空間を挟んで対峙する様に存在しており、中期を通じて住居跡が営まれた結果、環状に住居跡が分布する景観を呈している。調査区南側の松林にあたる未調査区に、何軒かの住居跡の存在が予想されるが、集落の景観はあまり変わらないものと思われ、現在までの調査結果からでも大山遺跡における中期集落のおよその様相と経過が把握されるものと思われる。

第6次調査の報告において住居跡の構造的な変化と、土器群の変化を合わせて集落変遷を概観したことがある（金子1982）。その際、出土土器を基準として住居跡を6段階の変遷で捉えたが、今日的な土器群の解釈からは必ずしも当時の編年観が妥当なものとは思

われない部分もあり、同一時期の住居跡の組み合わせに変更の余地がある可能性も残されている。

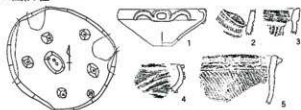
それは、加曾利EⅠ式終末から加曾利EⅡ式の細分基準の変化が原因となっている。第6次調査の段階では、加曾利EⅠ古段階、加曾利EⅠ終末~EⅡ式初頭段階、加曾利EⅡ式古段階、加曾利EⅡ式中段階、加曾利EⅡ式新段階、加曾利EⅢ式古段階の6段階の設定で集落変遷を捉えてみた。これ等の土器群の段階設定は当事業団の中期土器編年（谷井他1982）の段階設定に準拠しつつさらに細かな視点で設定したものであった。しかし、事業団編年は土器群の解釈においても妥当性に欠ける部分もあり、今日的な土器群の出土状況から解釈される様相と必ずしも一致しない部分があり、再考の段階にきているものと思われる。今回、再度大山遺跡の中期集落を分析するに当たっては、土器群の再編を考慮しつつ新たな視点で段階設定を行い、分析の基準とした。

第Ⅰ段階

加曾利EⅠ式古段階であり、A区第9号住が相当する。段階設定は、第6次報告と変わらない。住居跡の形状は橢円形を呈し、5本柱を基本とする。出土土器は、口縁部が「コ」字状を呈し、半隆起状のモチーフ

第16図 縄文時代中期の住居跡集成 (1)

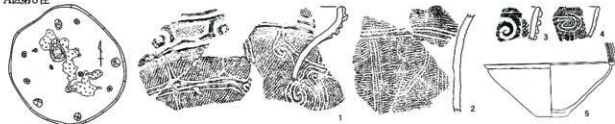
A区第9住



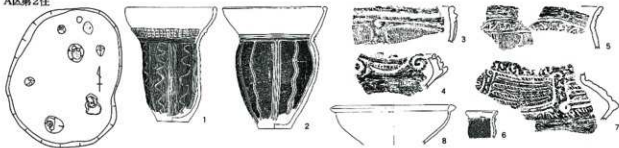
A区第1住



A区第8住



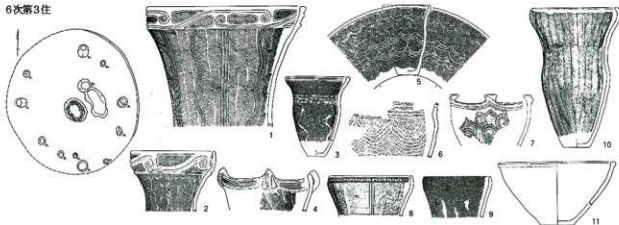
A区第2住



6次第1住



6次第3住



第17図 縄文時代中期の住居跡集成 (2)

A区第6住



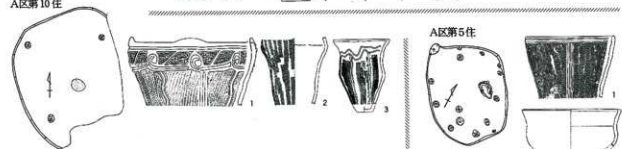
6次第2住



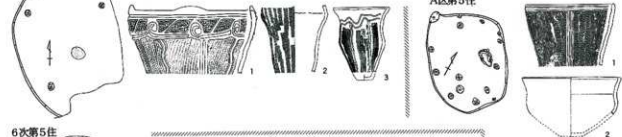
A区第3住



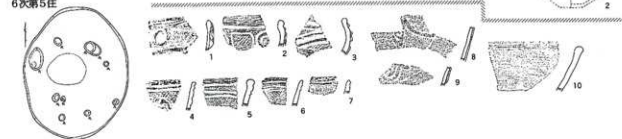
A区第10住



A区第5住

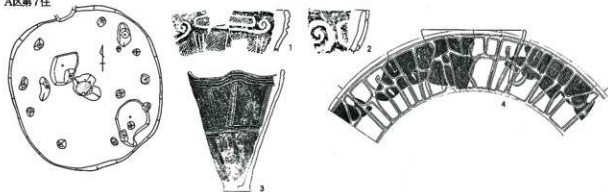


6次第5住



第18図 縄文時代中期の住居跡集成 (3)

A区第7住



A区第4住



を描く勝版式系の浅鉢(1)が存在する。他に、口縁部文様帯を持つキャリバー系の土器群が存在し(4)、地文に蒸糸文を施文したり、2本隆帯で横「S」字状文を構成する土器群が主体を占める。現在まででは、A区第9号住の1軒のみが確認されている。

第Ⅱ段階

加曾利EⅠ終末～EⅡ式初頭段階であり、連弧文土器が出現していない段階である。第6次報告と段階設定は同じであるが、該当する住居跡が異なる。第6次報告では連弧文土器の出現期とこの段階をだぶらせて考えていた。今回再検討するにあたり、最も問題となった段階であり、大山遺跡では加曾利EⅠ式の最終末の様相を持つ土器群の組み合わせの中に、連弧文土器を伴わない段階が存在することが明らかになってきた。この段階を以て一段階を設定し、その型式的な帰属については検討の余地を残しておきたい。詳しくは、後述したい。

A区第1号住、A区第2号住、A区第8号住、第6次第1号住の4軒が相当する。住居跡の形状は小半円状の長楕円形を呈し、5～6本を主柱とするものと思わ

れる。A区第1号住と第6次第1号住は壁溝を持ち、殆どの住居跡が中央部や北側の奥壁側に炉を持つ構造である。

出土土器は加曾利EⅠ式のキャリバー系土器群では口縁部文様帯、頸部文様帯、胴部文様帯の3文様帯構成(A区1住1、6次1住3)と口縁部文様帯、胴部文様帯の2文様帯構成のキャリバー系土器(6次1住1)が存在する。頸部無文帯には縄文や条線文を施文するもの(A区1住1、A区8住2)が出現する等、頸部無文帯を設定しない土器群の影響を受けて質的な変化が窺える。無文の口縁部が開く曾利式系統の器形で、胴部に加曾利EⅠ式の懸垂文を施文する土器も特徴的に存在する(A区2住1、2、6次1住5)。

口縁部文様帯は隆帯の渦巻文が単独で渦を巻く曾利系の要素の強いモチーフ(A区1住1)や、口縁部下端の区画を行わずに隆帯の渦巻文を弧状に繋ぐ繋ぎ弧文をモチーフ化したもの(6字1住1、3)も存在する。胴部文様帯には懸垂文の他に、曾利式系統のU字状のモチーフ(A区8住2)や、大木8b式系統の渦巻文やクランク文等の剣先文を伴うモチーフ(A区

8住1、6次1住6)が施文されており、中には横連結の十字状の懸垂文を施して、頸部に連弧文土器の基本分帯の祖形となり得る杓状文を構成する土器(A区8住1)も出現する。この段階では、いづれの地域においても確実な連弧文土器は存在していない様である。この段階に伴出する曾利式土器は、曾利Ⅱ式段階の土器群である。しかし、曾利Ⅰ式後半段階の要素は確実に残存している。

第Ⅲ段階

連弧文土器が成立する段階であり、沈線文間を明らかに磨り消す磨消縄文手法が主体的には展開しない段階である。第6次第3号住、A区第6号住が相当する。第6次の報告では加曾利EⅡ式古段階とした段階であり、連弧文が盛行するとした段階である。住居跡は第Ⅱ段階より丸味を帯びた長楕円形となり、多柱穴の構造になるものと思われるが、基本的に大きな変化は無いものと思われる。

キャリバー系の土器群は頸部文様帯を殆ど持たなくなるが、口縁部のモチーフが比較的崩れの少ない段階で、第Ⅱ段階の頸部文様帯を持たない土器群からの変化は少ない(6次3住1、2)。胴部懸垂文は沈線懸垂文(6次3住1、2、A区6住3)を主体とするが隆帯(A区6住10)も存在する。連弧文のモチーフが盛行するため、同様な分帯構成を採り連弧文を施さない土器群(6住3、6)も出現する。中には、口縁部文様帯を持ち、頸部に連弧文土器特有の区画文を施すキャリバー系土器(A区6住1)もあり、第Ⅱ段階(A区8住1)からの変化の過程が知られるものも存在する。連弧文のモチーフもバリエーションが増え(6次3住7、A区6住10)、描出も3本沈線文を基本とするもの(6次3住5、A区6住7、8)が主体を占める。また、縄文(6次3住9)や条線文(6次3住10)のみを施文する粗製の土器群が存在する。曾利式系の土器では無文の口縁部が開く曾利Ⅱ式系の土器で、胴部に連弧文を施文するものがある(A区6住10)。この段階には曾利Ⅱ式系の要素を強く残す曾利Ⅲ式段

階の土器群に伴う。

第Ⅳ段階

磨消縄文手法が盛行する段階であり、各モチーフが崩れる段階である。第6次の報告では加曾利EⅡ式中から新段階とした段階である。住居跡の形跡は第Ⅲ段階とあまり変化は無く、やや多柱穴化の傾向が窺える。A区第3、5、10号住と第6次第5号住が相当する。第6次第2号住は、出土土器の胴部懸垂文や粗製の在り方から第Ⅲ段階的な印象を受けるが、磨消懸垂文を持つ土器(6次2住4)が出土していることや、口縁部文様帯のモチーフがやや崩れている(6次2住1)ことから、第Ⅲ段階と第Ⅳ段階の中間的な様相と把握されるが、連弧文土器の口縁部が大きく開く器形や(6次2住5)、2本沈線文描出等の要素を勘案すると、第Ⅳ段階に位置付けられる可能性が高いものと判断される。

キャリバー系の土器群では口縁部文様帯のモチーフが崩れ(A区10住1)、胴部に明瞭な磨消懸垂文を施文するもの(A区3住6)が盛行する。平縁の口縁部に4単位の波状突起が付く土器群が出現し(A区10住1)、地文のみの粗製土器においても小波状突起の付く土器が成立する。連弧文土器では連弧文のモチーフが崩れると共に磨消手法が採用され、2本沈線文描出(A区3住4、A区10住3)が一般的となる。また、口縁部文様帯を喪失する土器群(A区3住6、A区5住1)が、曾利Ⅲ、Ⅳ式系の影響を受けて成立する。従来の加曾利EⅡ式新段階の様相に近いが、磨消縄文の卓越と、連弧文土器の崩れる現象が同時期的であり、今日的な遺物出土状況から、従来EⅡ式中と新に分けた様相の相違を明瞭にし得ないことが明かとなりつつあり、むしろ系等差や地域差に還元される可能性の高いことが把握されるつづつあると言えよう。また、磨消縄文手法の獲得盛行は、各種の文様モチーフを同時期的に成立盛行させる強い要因になったことが推察される。

第V段階

吉井城山系のモチーフや隆帯の渦巻文土器が出現する段階で、第6次報告では加曾利EⅢ式古段階とした段階である。A区第4、7号住家が相当する。住居跡の形態はほぼ円形に近いものとなり、中央部に炉を設けるが、第Ⅲ、Ⅳ段階からの糸譜で捉えられるものであり、大きな変化は見られない。

大山遺跡ではこの段階の良好な土器群には恵まれておらず、遺跡の主体的時期でもなく、この段階を以て中期の集落は終焉を迎えている。この段階は連弧文のモチーフの延長上に成立する吉井城山系の褶曲文モチーフが成立する段階で、さらに崩れたモチーフの口縁部文様帯を持つキャリバー系の土器群が残存する段階である。大山遺跡からはこのキャリバー系の良好な資料は得られていないが、第Ⅳ段階にみられたH状懸垂文が、変形して抱球文状のモチーフと化した土器(A区4住1)が出土している。大きくくの字状に屈曲する浅鉢(A区4住2)も出土しており、第Ⅳ段階からの変化の延長で捉えられる土器群が出土している。また、隆帯の渦巻文系の土器では、渦を巻かずにやや直線的な器形でパネル状の区画文と化したモチーフを構成する土器(A区7住4)が出土している。さらに、連弧文土器の分帯の糸譜上にある土器(A区7住3)も出土している。従来、その出現を以て加曾利EⅢ式と認定されていた諸要素は、現在EⅢ式新段階やEⅣ式の要素を持つ土器群と伴出することが指摘されており、EⅣ式を取り込む形でEⅢ式土器論が展開されつつある段階に至っている。

以上、大山遺跡の中期集落を第6次報告内容と合わせて、今日的な土器群の解釈から第Ⅰ段階から第Ⅴ段階までの5段階に区分し捉え直して考えてみた。まだまだ、土器群の解釈等によって流動的な部分を含むが、住居跡の覆土に含まれる土器群の幅を以て段階差を設定し、住居跡の分類を試みた。当然、集落内に於ける絶対的な微妙な時間差は生じているはずであるが、それを現行の土器論では保証されるレベルにおいて証明しきれないのが実態である。土器を細かく細分した

としても、翻ってその土器論を証明する保証の手だては存在しないので、その限りにおいて集落論の限界を自覚する必要がある。

また、一方では時間軸の基礎となる土器論の限界性を認識した上で、別の方法論による集落分析の遂行も当然必要となってくる。住居跡の一括遺物を基準として、数多くのクロスチェックを得て設定された時間軸内での同時期認定を受けた住居跡間の時間差については、土器論で導き出し得ないことを自覚した上で、別の方法論で証明しなければならぬ。土器をいくら細かく細分したとしても、それが集落を細かく分析し理解することにはならないことを、自戒を含めて現行の集落論は認識すべきである。とはいえ、保証の手だてのある究極までの土器細分は今後絶えず追求されなければならない。それが集落論をより精度の高いものへと導くことは言うまでもない。土器論なくして集落論を語れないことも、また自明の理なのである。その矛盾を相対してこそ、集落論の質的向上が期待されよう。

大山遺跡の集落分析は、集落の全体像が完全に明らかにされたわけでもなく、分類基準となる土器論も定まったものではないため、流動的な試論として行ったものであることをことうわて置きたい。その流動的である根拠は土器の細分基準にあり、かつての分類基準が見直しの段階的にあることを示している。

今回提示し得る問題点としては、後に触れるが、加曾利EⅡ式段階の土器群の細分にある。加曾利EⅢ式土器は比較的その変遷が容易に理解されると思われてきた土器群であり、最も細分の進んだ土器型式でもあった。それは、基本的に加曾利EⅢ式土器の型式学的な変化が捉えられなく、把握しやすかったと思われていたところであろう。口縁部文様帯、頸部無文体、胴部文様帯の減帯現象や、変化の組み合わせを進化的に把握することで、時間的な縦の変化を確認してきたものと錯覚してきた観がある。しかし、その間に、空間的な横への変化の認定を怠ってきた事実がある。変化の横への法則と、地域的な様相の把握、地域毎における前系統要素の残存形態の相違等の把握が、時間差を設

定する方法論と比較して等閑にされてきたことは否められない事実であろう。地域における様相の相違さえも、時間差に置き換えて把握してきた可能性があることも危惧されるところである。

その当事者の一人として、反省を含めて加曾利E式土器を再度検討すると、今日の資料が増えた段階では、一括資料中に従来の見解では理解の難しい組み合わせが窺えることがわかってきた。従来の既成概念による型式観では理解し難い組成も、その出土漸数を重ねることにより、単なる混じりと看過し得ないものであることが理解され、型式観の変更を余儀なくされてきたのである。従来は、御都合主義で単に一括遺物から省いていたものも、視点を変えて一括性を認めるところからまた新たな展開が開けてくる場合もあるのである。

近年の県内の研究者による加曾利E式土器再検討の成果と気運に乗じて、大山遺跡出土土器を分析すると、加曾利E I式終末と加曾利E II式終末の問題が浮かび上がってきた。いずれも従来の細分を短縮する方向に向かっているが、前述した様に、広域編年も視野に入れて、住居跡一括出土遺物から横への変化の法則と地域性を検討した結果、論理上無理のない範囲内で認識

3. 加曾利E II式土器細分の再検討

大山遺跡の住居跡出土土器を中心にして集落の分析を行った結果、加曾利E I式終末からE III式に至るまでに4段階の変遷が想定された。この4段階が連続したものか捉えるか、断続するものと捉えるか、または、断続しながらもさらに細かな段階に区分されると捉えるかは見解の異なるところであろう。1982年の大山遺跡第6次の報告(金子1982)では、連続的にさらに細かい段階として把握しており、その結果、同時期とされる住居跡数を少なく認定してきた経緯がある。その基準は1982年に等事業団の紀要で発表された「縄文中期土器群の再編」案に準じて設定したものであったが、1996年の現在では前述した様に、出土土器群の組み合わせ等からその編年案は再検討の時期に来ていること

される段階として、加曾利E I終末からE III式が仮に4段階に細分される見通しがついてきたことが最大の成果としてあげられよう。

この各段階は大体で把握される段階であり、時間幅も長いものと考えられる。しかし、土器群の組み合わせや変化から現在操作概念として認識され得る時間幅であり、今後1個体1型式的な、または1要素1型式的な細分型式ではなく、各要素を満たす条件で、さらにそれらの総合的な変化の階梯が把握される段階として細分される可能性を残している。土器群に強制的な枠組みを架して限定的階梯的に捉えることから、一見規制的でありながらも広域かつ複雑なネットワークに支えられた開放的な類型の総合体としての側面をも持つものと認識することによって、その展開場所である集落に対する捉え方も必然的に変わってくるものと思われる。近年の人口移動論等に導かれた集落論の批判的継承を受けつつ縄文時代集落観が変わることは、その延長上に縄文時代史像及び時代史観の変更が余儀なくされおり、「発見の考古学」によってのみ縄文時代史観の変更が迫られるのではないことを明らかにしていくものと思われる。

は間違いない。

筆者は再編案の際に加曾利E II式に対応するX I (E II古)、X II a (E II中)、X II b (E II新)の段階を担当した。實質上、加曾利E II式を3段階に区分し、連弧文土器に基準を置き、加曾利E式のキャリパー系土器群の変遷と連弧文土器との関連から、モチーフの崩れる方向性を段階的に把握したものであった。簡単にその基準を述べると、

E II 古段階…連弧文土器が成立する段階で、キャリパー系土器では縄文の施される頸部無文帯が残存する等の加曾利E I式新段階の要素が残存し、磨消懸垂文が成立していない段階。

E II 中段階…連弧文土器が盛行し、キャリパー系の

土器群が衰退する段階で、胴部懸垂文に磨消懸垂文が成立する段階。

E II 新段階…連弧文土器が急速に衰退して、キャリパー系土器群が盛行し、口縁部文様帯を喪失する土器群が成立する段階。

となろう。E II 古段階におけるキャリパー系土器は加曾利E I 式新段階と連続的でその区分が不明瞭であった。その点については谷井彪氏が、大山遺跡出土土器群を題材として加曾利E I 式直後の土器群について論じている(谷井1979)。

谷井氏は頸部無文帯の最後の段階から、磨消懸垂文が生じる間に、地文が施文される等の変容された頸部無文帯が残存しながら、磨消懸垂文の成立しない段階を抽出して、加曾利E I 式とE II 式の中間的なE I 式直後の段階とした。この段階が実質的に加曾利E II 式古段階とされて、この段階に連弧文土器が成立するものとの考えを示した。この谷井氏の見解は、笹森謙一氏による島之上遺跡の加曾利E II 式土器3細分の研究成果(笹森1977)が背景にあり、笹森氏の示した加曾利E II 式古段階の様相より、若干古い様相を持つ段階として加曾利E I 式直後の段階を設定したものであったが、基本的には連弧文土器が共存するという認識からE II 式古段階という枠組みで捉えられていたものと思われる。笹森、谷井両氏とも連弧文土器の出現を以て、加曾利E I 式からの分離、つまりE II 式の成立と把握しており、筆者も「縄文中期土器群の再編」(金子1982)や大山遺跡の第6次の報告(金子1982)では加曾利E II 式土器を同様の基準で分類した。

しかし、今回、再度大山遺跡出土土器を検討するに当たって、加曾利E I 式終末と谷井氏の指摘したE I 式直後の段階と連弧文出現期(E II 古)の土器群の様相に混乱をきたしていることに気付いた。つまり、谷井氏の指摘したE I 式直後の土器群と連弧文土器は、大山遺跡においては実は共存関係が認められなかったのである。むしろ、連弧文土器さえ含めなければ、大宮台地における連弧文土器出現前段階の土器群の様相を的確に指摘していたのであった。

連弧文土器が伴出したA区第6号住出土土器は、谷井氏がE I 式直後に置いたA区第1号住、第2号住、第8号住より後出的であり、特にA区第6号住1がA区第8号住1より明らかに後出的であることは先にも述べたと通りである。また、第6次第3号住出土土器は、笹森氏がE II 古段階に位置付けた島之上遺跡第3号住に極めて類似した内容を保有している。筆者が大山遺跡第6次の報告で、E I 式終末～E II 式初頭段階、E II 式古段階を設定して住居跡を分けたのもこの理由からであった。その際、連弧文土器を伴うA区第6号住をE I 式末～E II 式初頭に誤って位置付けたのは連弧文土器が比較的古相を帯ていたからであった。今回改めて検討すると、第6次第3号住と同段階に位置付けられることは明らかであり、連弧文土器が盛行する段階に改めて位置付け直して置きたい。

それでは、何を以てこの時期を区分すれば良いのかが問われてくる。最も明瞭なのは、連弧文土器の出現を以て区分することである。しかし、連弧文土器の成立段階も各研究者によって意見の異なるところであり、見解の一致を見ない。桐生直彦氏(桐生1981)は東京編年(安孫子・秋山1980)の第三期(E I 終末に相当)に、安孫子昭二・秋山道生両氏は第四期(E II 古に相当)に成立する考えを示した。東京編年の第三期と第四期の内容は我々の考える内容と若干異なるが、埼玉県で連弧文土器が出現する段階はおおよそ東京編年の第四期に当たり、谷井氏が指摘したE I 式直後の段階は第三期内に包括される。埼玉県が連弧文土器の発生の地ではないとしても、加曾利E II 式段階になってから連弧文土器が成立することは明白である。

谷井氏はE I 式直後の段階を、「E I 式後葉の土器群と比べてみると、土器全体の基本的組み合わせのあり方は新たに出現した連弧文系土器を除くとほとんど変化がない」と述べているが、連弧文土器がこの段階に存在しないとすると、E I 式直後の段階はE I 式後葉の土器群の変化を指摘したことになる。

この変化が時間的に縦の変化であるのか、先に指摘した様に空間的な横の変化であるのかの問題となる。

結論的に言えば、空間的な横の変化である可能性が高いことを指摘できよう。従来、時間的変化として捉えていたことから、相模から多摩にかけての地方で成立したとされる連弧文土器が、やや時間的経過を経て周辺へと拡散したとする考え方が生じて来たのであろう。EⅠ式終末に位置付けられる成立期の土器群が、その地域に存在していることがその考え方を示している。EⅠ式終末と認定された根拠は、頸部無文帯を持つキャリバー系土器が存在することに他ならない。

縄文土器の広域編年を思考するとき、一つの要素の現れについてそれを定点和し、ホライズンを形成しその平行関係を想定することは常套手段であり、それがI型もずれることは考え難いことである。成立地域の連弧文土器を含む土器群が、大宮台地の連弧文出現期の土器群と同様に新しい段階(EⅡ式)であるのか、逆に大宮台地の土器群が古い段階(EⅠ新)であるのかの何れかであるにしても、ほぼ同時に成立していると思ふことが型式学的研究の必要条件であらう。発掘数が増えた段階で、大宮台地において従来のEⅠ式新段階の連弧文土器が未検出であると言ひ難い。事実、伊奈町原遺跡(村田1996)では、連弧文土器とともに隆帯渦巻の繋ぎ弧文の口縁部文様帯を持ち、頸部無文帯の残るキャリバー系土器が出土している。大山遺跡例等と連弧文土器を比較してみても、時間差は感じられない。ここで、また両者の共存関係に矛盾が生じることになる。頸部無文帯を持つ土器が連弧文土器段階にまで残存していると解釈せざるを得ない。または、混じりと解釈するかの何れかである。多摩地域においても、状況は同様である。

加曾利EⅡ式のキャリバー系土器は、EⅠ式では口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯で構成され、EⅡ式で頸部無文帯が消滅し、胴部に磨消懸垂文を持つことがメルクマールとして認識されてきた。その中間的な様相は、笹森氏に依って抽出されてEⅡ式古段階として設定された。谷井氏は連弧文土器の判定を避け、大宮台地における笹森氏が抽出したEⅡ式古段階以前の、EⅠ式の変化の延長上にある最新段階の様相

を抽出したのであった。

西関東地方におけるEⅠ式直後の段階の土器群は、門田遺跡第8号住(新藤1976)、二宮遺跡第8号住(紀野1978)が代表的な遺跡として挙げられる。この段階では、口縁部文様帯に渦巻文主導型のモチーフ、楕円区画文と渦巻文の集約された組み合わせモチーフが存在し、特に後者のモチーフを持つ土器では頸部無文帯を消失するタイプが現れるのを特等とする。そして、籠目文土器等に代表される所謂曾利Ⅱ式が伴出し、連弧文土器が存在していないことを特徴として押さえられる。

大宮台地と比較すると、やや古い様相が看取されるが、門田遺跡第8号住では頸部無文帯内に縄文を施文する土器や、頸部区画線が下へ下がり頸部無文帯の幅が広がるものや、逆に狭くなるものが出現する等、大宮台地と同様相を呈し、加曾利EⅠ式の質的な変化が現れている。また、頸部無文帯を消失する土器では、楕円区画文と渦巻文のモチーフが、大山遺跡第6次第3号住や島之上遺跡第3号住出土土器と非常に近似している。従って、門田遺跡第8号住を代表とする段階が、谷井氏の指摘したEⅠ式直後の段階に対比されることは明かとならう。

この様に、連弧文土器ホライズンを設定することによって、連弧文土器を伴うことが確実と思われる頸部無文帯を持つキャリバー系土器は、EⅡ式古段階にまで下げて考え直す必要があり、EⅠ式の要素が残存したもとして解釈される根拠を持つのである。頸部無文帯が加曾利EⅡ式にまで残存し、特にEⅡ式中段階にまで存在することは、笹森氏が既に島之上遺跡第16号土壇出土土器で指摘している(笹森1977)。頸部無文帯に拘るのであれば、大木8b式や9式の影響を受けた加曾利EⅢ式のキャリバー系土器にも、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に明瞭に頸部無文帯が存在している事実がある。従って、頸部無文帯の有無では傾向は捉えられても、基準になりえないことが明瞭となる。

連弧文土器ホライズンで周辺地域の土器群を比較してみると、曾利式に於ける連弧文土器出現期の様相が

注目される。連弧文土器は、柳坪遺跡(末木1975)出土土器の様な胴部が括れて区画され、口縁部に繋ぎ弧文が巡り頸部に縦の分割線が入る咲畑系とされる土器の分帯や文様構成を基本スタイルとして成立したものと考えられてきた。最も古いとされる連弧文土器は、このスタイルと文様構成を採り、加曾利EⅠ式終末段階に位置付けられてきたが、曾利式と伴う連弧文土器は、関東の土器群に先んじて古く位置付けられるものはないものと思われる。それは、伴出する加曾利系曾利Ⅲa式の文様や文様構成の崩れ具合が、EⅠ終末段階にまで遡るものがないことに起因する。山形真理子氏が、関東との比較においては問題を残すものの、連弧文出現段階を以て曾利を古式と新式に区分するのは妥当性のあるものと思われる(山形1996)。頸部無文帯の有無のみでは、前述した様に加曾利EⅠ式段階に比定される根拠とはならない。ここでは詳細な説明は加えられないが、曾利式内においても連弧文土器はEⅡ式古段階以降の枠内に納まるものと思われ、連弧文土器ホライズンの有効性が認められよう。

また、大木式においては、中ノ内B遺跡(伊藤1987)第1号土壙出土土器に、頸部無文帯を持ち連弧文を施文する大木8b式土器が出土している。水沢教子氏は大木8b式の新段階に位置付けているが(水沢1996)、共伴する土器の胴部渦巻文や口縁部文様帯を比較すると、加曾利EⅡ式古段階に位置付けられものと思われ、やはり、連弧文土器ホライズンは有効であることが理解される。

各地の土器群との比較において明らかな様に、連弧文土器出現期をEⅠ式終末にとらえる見解は、頸部無文帯の存在が大きな理由になっているようであり、その要素を除いて、共伴する土器群の総合的な要素比較を行うと加曾利EⅡ式古段階に対比される要素の多いことが明かとなろう。従って、連続と継承する要素群の中から、連弧文土器ホライズンをもって土器群の画期を捉えることが最も有効的であると思われる。

加曾利EⅡ式古段階はEⅠ式に後続する段階であるが、大山遺跡第6次3号住や、島之上遺跡第3号住出

土土器を詳細に検討すると、口縁部文様帯のモチーフ構成はEⅠ式直後段階に直結する要素を持つが、胴部地文に複線縄文を施文したり、条線のみ土器が成立していたり、連弧文系の土器では胴部懸垂文の上端が曾利Ⅳ式の様に連結した描線を採用した土器群が成立している。従来考えていた位置付けよりかなり新しい要素が垣間見られ、従来のEⅡ式中段階的な位置付けが考えられる。しかし、明瞭な磨消懸垂文は出現しておらず、磨消懸垂文自体がかなり後出の要素であることが理解される。従って、次の画期は、明瞭な磨消懸垂文の出現に求められる。

磨消懸垂文こそが、加曾利EⅡ式の最も典型的なメルクマールであったが、現在の土器群の組み合わせからは、加曾利EⅢ式との過渡期的な要素であることが明かとなっている。磨消懸垂文が施文される土器は、口縁部の渦巻文と区画文の構成がやや集約化されていたり、4単位の小突起が付く波状口縁を呈するものが出現したりしている。また、胴部磨消懸垂文の上端が連結したり、口縁部文様帯を消失するものが出現したり、前段階とは様相を異にする。中にはH状やU字状の磨消懸垂文を施文するものさえも共伴する様になる。連弧文土器では、2本沈線文描出や、2本沈線文間を磨り消す手法が採用される。磨消縄文手法の出現と共に、文様構成及びモチーフに画期的な変化が現れる。先の編年では加曾利EⅡ式新段階と把握していた段階であるが、EⅢ式古段階との明瞭な区分が難しい段階である。しかし、連弧文土器の変化形態としての所謂吉井城山類は、基本的には伴わない段階として認識される。

そして、次の段階に吉井城山類が出現し、口縁部文様帯を持つキャリバー系土器が残存する段階を迎える。この段階の口縁部文様帯のモチーフは、渦巻文と区画文が流れて重層的に入り組む構成を採るもの、渦巻文が波頂部で楕円区画化するもの、楕円区画のみの組み合わせになるもの等、EⅡ式初頭段階からのそれぞれの系譜で集約及び簡略的に変化してきた構成となっており、所謂、加曾利EⅢ式の段階のモチーフ

である。

加曾利EⅢ式は谷井彰・細田勝両氏によって大木9 a・9 b式に合わせられて、古新の段階に2細分された(谷井・細田1995)。そして、加曾利EⅣ式は時間幅としての存在が比定され、EⅢ式新段階に組み込まれて位置付けられた。しかし、口縁部文様帯を持つキャリバー系の土器群は古新の両段階に確実に存在しており、吉井城山類と合わせて両段階に区分することは大変難しい状況を呈している。また、EⅣ式になってから存在が知られていた柶鏡形住居跡は、北本市提灯木山遺跡(磯野1996)ではEⅢ式古段階の土器群を伴っており、従来のEⅢ式古段階では既に成立していた様である。加曾利EⅣ式がEⅢ式新段階に編入されたとしても、口縁部文様帯の残存傾向や、柶鏡形住居跡の存在等共通する要素が多く区分することが難しいことを考慮すると、両氏のEⅢ式の古新細分案にはまだ再考の余地が残されているものと思われる。

以上、加曾利EⅡ式土器を中心として前後の土器群について、今日的な区分論を展開してきたが、確たる基準もなく流動的であるのが現状である。いつの時期でも同様であるが、多系統で複数要素の集合体である土器群を明確に区分することは殆ど不可能に近い。住居跡出土一括遺物から認識される時間幅を一つの単位とし、多くのクロスチェックを経て認識される段階幅を設定することが基本となる段階認識である以上、要素の錯綜と一定の時間幅を有することは前提条件である。そこにある錯綜したと認定される状況こそが、実態なのであろう。

最後に、いままで述べてきた各段階を要約すると、**第1段階**…加曾利EⅠ式直後段階で、頸部無文帯の消失する加曾利EⅡ式的なキャリバー系土器が出現しない段階。

第2段階…加曾利EⅡ式段階で連弧文土器が成立し、曾利Ⅲ式が伴う段階。頸部無文帯が残存し、磨消懸垂文が出現しない段階。

第3段階…加曾利EⅡ式終末からEⅢ式初頭段階で、

胴部に磨消懸垂文が成立する段階。連弧文の変化段階の土器群が伴い、口縁部文様帯を消失する土器が出現する段階。

第4段階…加曾利EⅢ式段階で吉井城山類、梶山類が出現する段階。口縁部文様帯を持つキャリバー系土器が主体的に残存し、従来の加曾利EⅢ式新段階、EⅣ式古段階の土器群が含まれる段階。

となる。

これ等の段階の詳細は別の機会に検討するとして、今回は最小限の区分の提示とその意義付けを行って置きたい。

第1段階では口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯を持つキャリバー系土器に、頸部無文帯の消失する土器が出現することに大きな意義を見い出せる。それは、加曾利EⅠ式終末において連弧文土器の生成に向けて構造的な変化が現れてきたことを示すからである。頸部無文帯の消失はEⅠ式初頭以来の東部関東的な2文様帯構成の系統要素が、広く西部関東地方の土器群に影響を与えることから生じるものと思われる。裏腹に文様帯構成の弛緩が、連弧文土器を成立させる構造的変革をEⅠ式の3文様帯系の土器群の中に生じさせたものと認識されるからである。従って、従来ではEⅠ式の枠組み内で捉えられていたが、EⅡ式への連続性を考慮し、EⅠ式土器の構造的な変革を評価して、土器群の把握としてEⅡ式の枠で捉えその古段階と認識して置きたい。

また、第3段階の確実な磨消懸垂文が現れる段階は、磨消織文手法の成立と共に懸垂文間の連結、曲線化が進められ、また、連弧文土器の描出手法にも影響をあたえ、組み合わせる土器群にEⅢ式的な要素の萌芽が認められることから、やはり土器群としての把握からEⅢ式の古段階として認識して置きたい。つまり、

第1段階…加曾利EⅡ式古段階

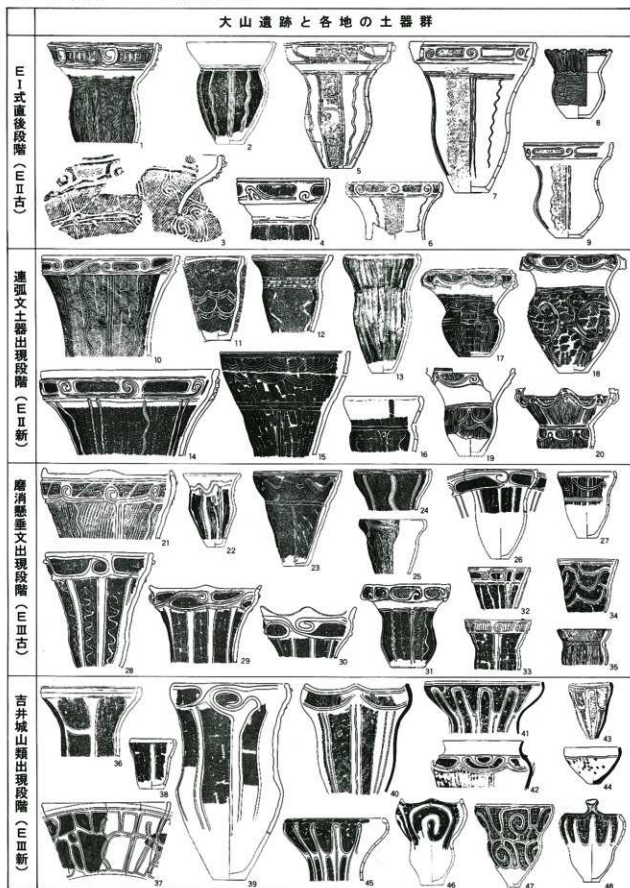
第2段階…加曾利EⅡ式新段階

第3段階…加曾利EⅢ式古段階

第4段階…加曾利EⅢ式新段階

となる。何れにしても、従来の型式観や呼称とは多少

第19図 加曾利EⅡ・Ⅲ式土器段階別変遷図



ずれるものとなるが、呼称は別としても、組み合わせる土器群の要素で区分すると以上の4段階が妥当と思われる。

しかし、その際に従来新旧の時間差で捉えられていた土器群を、横の変化である地域差に置き換えて把握していかなければならず、実際その方向での実証は途に就いたばかりである。流動的である所以であるが、今後その方向の検証に力を注いでいきたいと考えている。人間の行動の所産である以上、複雑で錯綜している状況こそが実態であると認識するところから、要素間の紐解きを行い、我々の認識し得る仮説としての時間幅と画期を模索していきたいと考えている。

<参考文献>

青木秀雄 1979「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会
安孫子昭二・秋山道生 1980「縄文時代中期後半の諸問題 土器資料集成図集」『神奈川考古』第10号
伊藤 裕 1987「中ノ内B遺跡—東北横断自動車道遺跡調査報告書II—」
磯野治司 1996「提灯木山遺跡第2次調査」北本市遺跡調査会報告書第2集
金子直行 1982「大山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第17集
紀野自由 1978「二宮」秋川市文化財調査報告書5
桐生直彦 1981「連弧文土器」『縄文文化の研究』4
笹森健一 1976「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第31集

笹森健一 1977「前畑・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
白石浩之 1977「当麻遺跡・上依知遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告書第12集
新藤康夫 1976「門田遺跡群 1975年度調査概報」
末木 健 1975「山梨県中央道報告書—北巨摩郡長坂・明野・葦崎地区内—」
谷井 彪 1973「坂東山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集
谷井 彪 1974「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集
谷井 彪 1979「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集
谷井 彪 1979「加曾利EⅡ式土器の覚書」『埼玉県立博物館紀要5』
谷井 彪・金子直行他 1982「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要紀要1982』
谷井 彪・細田 勝 1996「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」『日本考古学』第2号
水沢教子 1996「大木8b式の変容(上)—東北、越後、そして信州へ—」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター研究論集I
村田章人 1996「原/谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
山形真理子 1996「曾利式土器の研究—内的展開と外的交渉の歴史—(上)」『東京大学文学部考古学研究所研究紀要』第14号

第19図出典

1—大山A区1住、2—大山A区2住、3—大山A区8住、4—坂東山16住、5~6—二宮3住、7~9—門田8住、10~13—大山6次3住、14~16—島之上3住、17~18—中ノ内B1土壌、19—当麻22住、20—柳坪A2住、21~22—大山A区10住、23~25—大山A区3住、26~27—志久10住、28~30—花影9住、31—島之上16土壌、32~35—坂東山27住、36—大山A区4住、37—大山A区7住、38~39・45—志久4土壌、40~44—馬込12住、46—志久5土壌、47—風早埋蔵、48—島之上4住

4. 奈良・平安時代について

(1) 第1号住居跡の年代的位置付け

9次第1号住居跡の出土遺物で図化できたものは計17点ある。須恵器環が9点と多く、土師器環は見られない。器形全体がわかる環は5点あり、いずれも体部の立ち上がりは中程でやや膨らみ、口縁部が外側に反っている。底部は回転糸切り後調整は加えていない。法量は口径が12~13cm、底径が7cm前後、器高が3.5cm前後である。須恵器環は口縁部を欠くので、器形はわからない。底部は回転糸切り後、外周回転へら削り調整で、体部下端にも調整が加えられている。土師器環は3点図化できたが、すべて胎土が赤褐色で器肉が薄い「武蔵型環」である。口縁部の形態は第7図4のように「く」の字になるものと第7図15のように「コ」の字になるものがある。実測できなかった破片は後者の形態のものが多い。

この住居跡の器種構成の特徴は、供膳具は須恵器、煮炊具は土師器で構成されることである。この地域の平安時代前半の典型的な器種構成と言えよう。

この時期は須恵器の環が編年の基軸になっているので、次にこの住居跡から出土した須恵器の位置付けについて考えてみたい。

須恵器環の編年は底部の調整方法と器形および法量によって組み立てられてきた。底部の調整方法は「前面削り調整」→「回転糸切り後外周削り調整」→「回転糸切り無調整」と変化している。この住居跡は一番最後の段階にあたる。

さらに、この段階は法量と器形によって細分されている。その際、口径と底径の比率が一番の指標になっている。今回報告する住居跡出土須恵器の口径と底径の比率は0.52~0.58で、平均値は0.55である。口径<底径×2の関係にある。埼玉県内の須恵器窯跡編年の指標になっている資料と照らし合わせると八坂前窯跡第Ⅱ・Ⅲ段階（坂詰他 1984）、南比企業窯跡第Ⅶ期（渡辺 1990）の範疇に納まる。八坂前窯跡では武蔵国分寺七重塔の再建瓦を焼成しており、第Ⅱ段階は再建瓦を主に焼いた段階、第Ⅲ段階は再建瓦焼成終了

後の須恵器のみを焼いた段階とされる。武蔵国分寺七重塔の再建は『続日本後紀』の承和十二年三月廿三日条に再建発願記事がある。よって、再建瓦を焼成した窯には承和十二（845）年を上限とする年代が与えられている。本報文では住居跡の実年代を9世紀中頃としておきたい。

(2) 須恵器の産地

第9次第1号住居跡の遺物の中で第7図1・2・4・7・11・12は白色針状物質を多く含むので南比企業窯跡群の製品と思われる。それ以外のものは白色針状物質を観察できなかったが、胎土があまり緻密ではないこと、鉄分の吹き出しや片岩などの礫が含まれないことから東金子窯跡群や末野窯跡群の製品と思えない。白色針状物質を含まないことを除けば、南比企業窯跡群の製品と考えても大差ない胎土である。

これまでの調査で出土した須恵器の産地はどうか。第1次~第3次の調査で出土した図版掲載された須恵器34点を観察したところ白色針状物質を含むものは29点、含まないものは5点であった（註1）。含まないもののうち、B区第2号住居跡1・2は青灰色で緻密な胎土なので、東金子窯跡群の製品かと思われる。また、D区a-2号炉周辺出土6は雲母を観察できないが、逆台形の器形で体部下半と底部を一方の手持ち削り調整をしているので常陸か下総の窯跡の製品の可能性が高い。第6次調査の第12号住居跡から出土した図版掲載の須恵器9点のうち白色針状物質を含むものは8点、含まないものは1点であった。

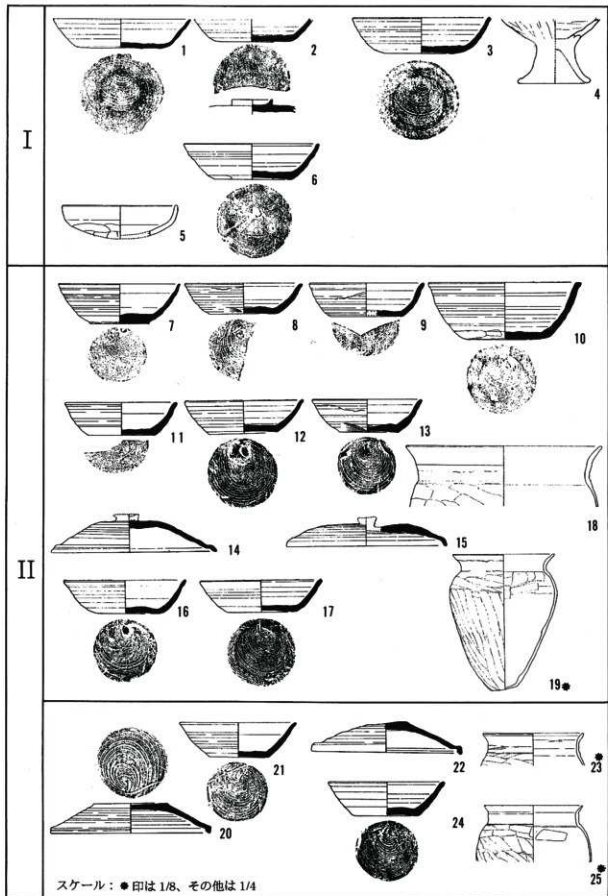
このように、奈良時代から平安時代前半にかけて大山遺跡では須恵器の大半が南比企業窯跡群から供給されていたことがわかる。

(3) 奈良・平安時代の大山遺跡

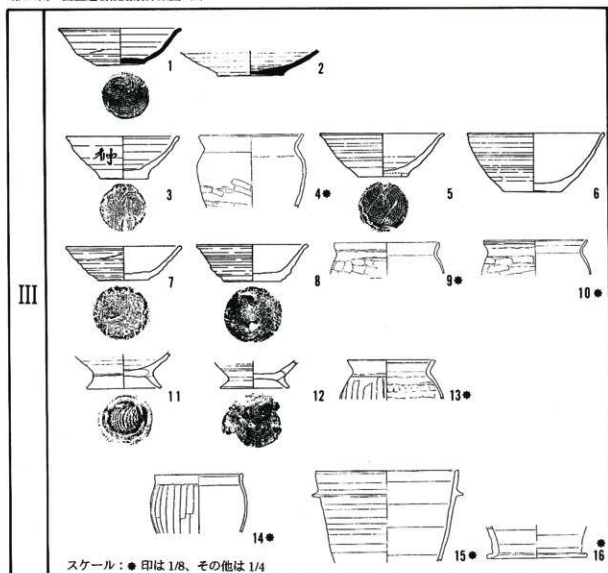
これまで大山遺跡では約50軒あまりの住居跡と多数の製鉄関連遺構が検出されている。

出土土器から大まかに3段階に分け、奈良・平安時代の大山遺跡についてここで少し考えてみたい。

第20図 出土遺物段階別分類図 (1)



第21図 出土遺物段階別分類図 (2)



第20図1・2 (A区第72号住)、3・4 (A区第76号住)、5 (A区第71号住)、6 (A区第68号住)、
7~11・18 (A区第44号住)、12~15 (A区第75号住)、16・17・19 (C区第2号住)、20~23 (A区第53号住)、
24・25 (A区第65号住)

第21図1・2 (A区第47号住)、3・4 (A区第56号住)、5・6 (B区第5号住)、7~10 (A区第60号住)、
11~13 (A区第57号住)、14~16 (6次第11号住)

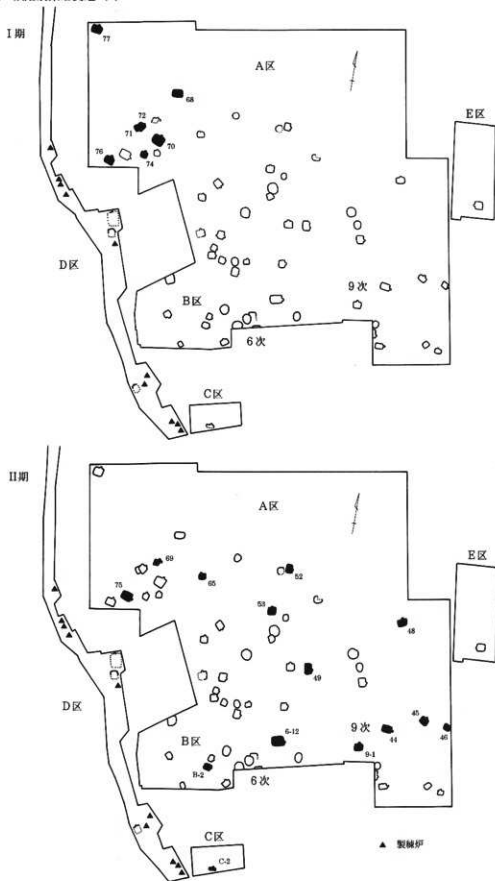
第I段階 (第20図・第22図)

第1~3次A区第68号住居跡・第72号住居跡・第76号住居跡出土遺物に代表される。須恵器杯の底部は前面回転削り調整または、中心部に回転糸切り痕を残す外周回転削り調整である。口径は14~14.5cm、底径は8~9.2cm、器高3.2~4cmで、比較的大型である。鳩山窯跡群の編年に照らし合わせるとⅢ期 (8世紀中頃) になる。第20図6 (A区第68号住居跡) と第20図

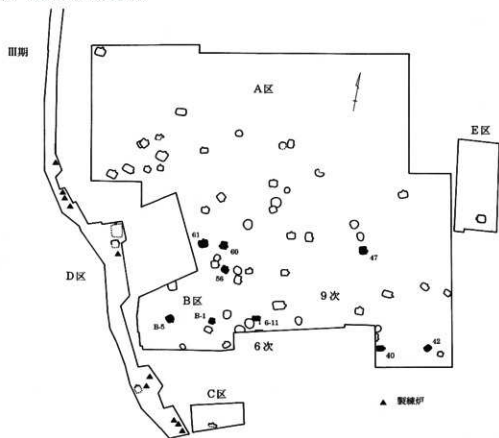
1・2 (A区第72号住居跡) は口径が14cm台で、体部の立ち上がり際が丸くないのでⅢ期でも前半になろうか。須恵器蓋のつまみは環状で、杯の形態と編年の合致している。残念ながら土師器甕の形態がわかる資料はない。

この段階に属する可能性がある住居跡としてはA区の第68号住居跡・第70号住居跡・第71号住居跡・第72号住居跡・第76号住居跡・第77号住居跡がある(註

第22図 段階別集落変遷 (1)



第23図 段階別集落変遷図(2)



2)。いずれも遺跡が立地する台地の中程、北西縁に集中している。

第Ⅱ段階(第20図・第22図)

新日の2時期に細分が可能である。古段階はA区第44号住居跡・A区第75号住居跡・C区第2号住居跡に代表される。須恵器坯の底部は回転糸切り無調整で、口径は11.6~12.8cm、底径は6.2~7.2cm、器高は3.2~4cmである。鳩山窯跡群の編年に照らし合わせるとⅥ期~Ⅶ期(9世紀前半~中頃)になる。土師器甕は赤褐色で器肉が薄い、武蔵型甕で、口縁部の形態は「コ」の字が主体的である。

新段階はA区第53号住居跡・A区第65号住居跡に代表される。須恵器坯の底部は回転糸切り無調整で、口径は12cm前後、底径は6.5cm前後、器高は3.6cm前後である。古段階に比べると器形が深身になっている。須恵器蓋はつまみの付かない、回転糸切り無調整のものが一定量存在する。鳩山窯跡群の編年に照らし合わせ

るとⅧ期(9世紀第三四半期)になる。土師器甕は古段階と同様に赤褐色で器肉が薄い武蔵型甕で、口縁部の形態は「コ」の字である。

この段階に属する住居跡としては、A区の第44号住居跡・第45号住居跡・第46号住居跡・第48号住居跡・第49号住居跡・第52号住居跡・第53号住居跡・第65号住居跡・第69号住居跡・第75号住居跡、B区第2号住居跡、C区第2号住居跡、6次第12号住居跡・9次第1号住居跡がある。遺跡の南半に広く住居が展開している。

第Ⅲ段階(第21図・第23図)

遺物の遺存状態が悪く、一つの住居跡で良好なセット関係で出土した資料がない。2~4点ほどの資料で構成された一括資料なので、ここで細かいことまで述べることはたいへん難しい状態にある。あえて資料を提示するなら、第21図のようになる。

須恵器は量的にたいへん少なく、土師質土器が主流

を占める(註3)。

須恵器環(第21図1A区第47号住居跡)は、底部は回転糸切り無調整で、底径は5cmとかなり縮小している。この環には白色針状物質を観察できないが、体部の膨らみが体部下半にあり、全体に薄手の作りなので南比企窯跡群の製品の可能性が高いように思える。土師質土器環はいろいろな器形・胎土をしており、産地がかなり多数あったことが推測できる。底部は回転糸切り無調整で、口径に対して底径がかなり小さい器形のものが多い。体部はロクロによる横なで整形されている。

土師質土器壺は高台が付くものと無高台のものがある。高台が付くものは底部外面、高台内側に糸切り痕を残し、高台の形態は「ハ」の字に開く(第21図11・12)。前段階の須恵器壺に比べると高台は高く、「足高高台」と呼ばれるようなかなり高さのあるものもある。第 図には前者しか掲載していないが、A区40号住居跡からは後者の形態が出土している。無高台の壺は1点しか報告されたものがない(第21図6B区第5号住居跡)。量的に少ないのであろうか。底部は手持ち篋削り調整で、内面はミガキ調整をして黒色処理が施されている。

土師器壺は「武蔵型壺」はほとんど姿を消し、厚手の甕が主体を占める。口縁部は「く」の字形態で、はっきり屈曲するもの(第21図4・9・10・13)と屈曲が弱いものがある(第21図14)。口縁端部は内側に折り返されたものが多い(第21図4・14)。製作手法は胴部上半が横篋削りのもの(第21図9・10)と縦篋削りのもの(第21図14)の二種類がある。

羽釜は6次第11号住居跡から1点出土している。胴部下半を欠損するので全体の器形はわからない。口縁部に最大径を持ち、口縁部に向かって胴部が直線的に開く形態である(第21図15)。

甕は6次第11号住居跡から1点出土しているが、底部のみの破片である(第21図16)。端部は屈折して外側に開く。このような形態の甕は羽釜のように鈔が付く類例が多い(註4)。

今回は資料が少ないことからⅢ期としたが、まとまった資料が出土した周辺の遺跡と比較すると実年代にはかなり幅があり、問題も多い。大宮市米川神社東遺跡では9世紀中頃とされる1期で、須恵器と酸化炭焼成された土師質土器が共存している(宮崎他 1993)。また、武蔵型壺とそれ以後の厚手の縦篋削りの甕が共存している。

確実な根拠はないが、A区第47号住居跡が他の住居跡よりも古いように思える。第21図1の須恵器環は底径が5cmと小さいので、9世紀後半とされる南比企窯跡群の上嶋井1号窯や山下5号窯よりも新しい段階と思われる。土師質土器は小皿が見られず、坏と壺のセットで構成されていることから11世紀初頭に納まると考える(註5)。よって、Ⅲ期は10世紀から11世紀初頭の年代を与えておきたい。

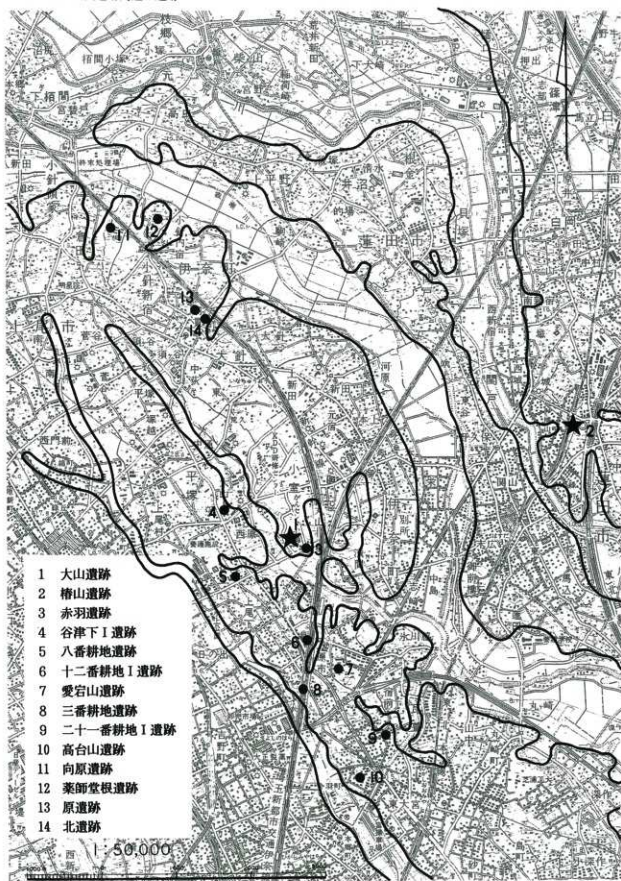
この段階に属する可能性のある住居跡としては、A区の第40号住居跡・第42号住居跡・第47号住居跡・第56号住居跡・第60号住居跡・第61号住居跡、B区の第1号住居跡・第5号住居跡、6次第11号住居跡がある。前段階よりも住居跡の分布が遺跡の南端に偏る。

このように大山遺跡は集落としては第Ⅱ段階が住居の軒数も多く、充実している。ただし、現状ではⅠ段階とⅡ段階の間には約半世紀の空白がある。未発掘区に住居跡が検出される可能性もあり、今後の調査に期待したい。

最後に地域の中で大山遺跡の位置付けについて考えてみたい。遺跡の立地と環境の中ですでに触れているが大山遺跡は大宮台地東部の原市沼川流域にあり、平安時代の製鉄関連遺跡として著名である。製鉄にはいくつかの段階があるが、大山遺跡では製錬→精錬→加工(鍛冶・铸造)の3つの段階が確認されている。製錬炉は4群16基検出され、いずれも台地の西斜面に占地している。この付近からはⅡ・Ⅲ段階の土器が出土しているが、主体はⅢ段階と言われてきた。

しかし、Ⅱ段階の住居跡からも羽口や鉄滓や鋳型が出土している。よって、ここではⅡ段階も製鉄に関連した集落であった可能性を考えたい。

第24図 大山遺跡周辺の遺跡



また、大山遺跡では製鉄に使用する炭を焼いた炭焼窯が検出されている。長方形土塊として報告されているが、地下式・半地下式で炭化室と前庭部からなるものと土塊を掘り炭材を並べてから蓋をする坑内製炭と呼ばれるものの二者がある。

大山遺跡の周辺では、これまでの発掘調査で炭焼窯がたいへん多く検出されてきた(第24図)。その形態は北遺跡(第24図14)は坑内製炭かと思われる長楕円形であるが、それ以外は炭化室と前庭部からなる地下式・半地下式の構造である。

ただし、炭焼窯からは操業時と推定される遺物が共存した例はなく、時期は不明や近世かと報告された例が多い。遺構の重複関係で時期推定されているのは原遺跡の事例で、近世の井戸を壊して炭焼窯が築かれていた。

赤石光資氏や小宮山克巳氏はこれらの炭焼窯を古代に遡る可能性が高く、大山遺跡の製鉄との関連で積極的に評価している(赤石1987、小宮山1994)。炭化室と前庭部からなる地下式・半地下式の構造の炭焼窯は福島県相馬地域開発関連遺跡では確実に古代に遡る。筆者も古代に遡る可能性の立場を取りたい(註6)。

それらの分布をみると、第24図3～9の各遺跡は大山遺跡から半径3kmの範囲に納まり、原市沼川の流域にある。

それに対し、第24図11～14の各遺跡は大山遺跡からはやや距離があり、綾瀬川の流域になる。蓮田市椿山遺跡(第24図2)や白岡町宮山遺跡にも製鉄関連の遺跡があるので、この地域の未発見の製鉄関連の遺跡に供給していた可能性もある。

やや、炭焼窯へと論点が移ってしまいましたが、大山遺跡は鉄生産を介して、原市沼川を中心的な遺跡であったということができよう。立地も原市沼川の谷の出入口にあたり、綾瀬川との合流する地点にも近い。交通の要衝でもあったのであろう。

註1 「大山」(埼玉県教育委員会1979)の報告書には胎土の観察が掲載されていないので、筆者が遺物を観察した結果である。ただし、今回観察できた遺物は図版に掲載されたもののうちの約8割であった。

註2 「可能性がある」としたのは、いずれの住居も第I段階の土器が覆土中から出土しており、確実に住居に伴うものとは断定できないからである。

註3 ここで言うところの土師質土器とは、須恵器の製作手法で作られているが、登り窯は用いずに土塊状の焼成遺構で焼かれたものである。よって、還元炭焼成されておらず、色調は褐色である。

「大山」(埼玉県教育委員会1979)の報告書では土師器と報告されていたが、本報告では実物を観察して、筆者の判断で新たに分類した。

註4 群馬県では荒砥上久保遺跡など器形のわかる資料が多く出土している。埼玉県内では上里町田中前遺跡(市川1977)・美里町ミカ神社前遺跡(中村1980)・熊谷市北鳥遺跡第12・13地点(大谷1990)などで破片資料が出土している。

註5 筆者は10～11世紀の供膳具の流れを「杯+高台付き椀」→「小皿+高台付き椀」→「小皿+大皿」と考えている(水口1991)。器種構成の変化はおおむね研究者間で共通理解されているが、実年代は研究者によってかなり異なる年代が与えられている。

筆者は「杯」から「小皿」へと変化する過程は11世紀前半と考えているが、10世紀後半とする研究者もいる。実年代については問題が多いのが現状である。

註6 平成8年度に筆者が調査した伊奈町業師堂根遺跡(第1次)では、地下式の炭焼窯が3基検出された。炭焼窯から時期を推定できる遺物は出土しなかったが、その中の1基は中世から近世初頭の土塊墓と重複関係があり、土塊墓よりも炭焼窯のほうが古かった。

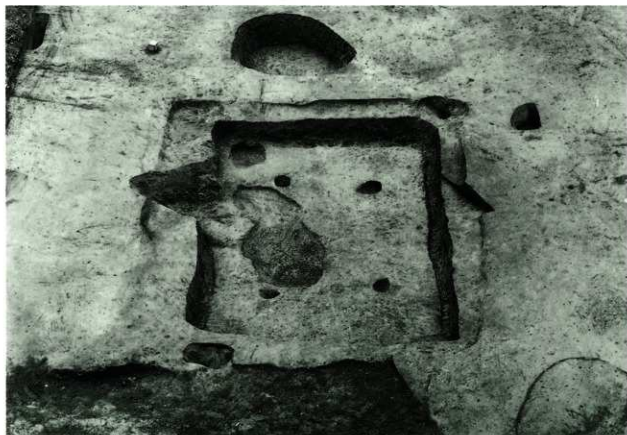
〈参考文献〉

- 赤石光資 1987『谷津下I遺跡』上尾市教育委員会
小宮山克巳 1994『八番耕地遺跡』上尾市教育委員会
市川 修 1997『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会
大谷 徹 1990『北島遺跡第12・13地点』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県歴史資料館 1987「埼玉の古代窯業調査報告書」
坂詰秀一他 1984『八坂前窯跡』
中村 倉司他 1980『ミカ神社遺跡・一本松古墳』
埼玉県遺跡調査会
水口由紀子 1991「武蔵国における中世成立期の煮炊
土器小考」『埼玉考古学論集』
宮崎由利江他 1993『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡
・B-17号遺跡』大宮市遺跡調査会
渡辺 一 1990「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉
考古』第27号
渡辺 一 1989「小谷B窯跡Ⅱ期と前内出窯跡の年代」
『埼玉考古』第26号
渡辺 一 1996「大宮台地東部における平安時代の二
三の問題」『下津弘君・塚越哲也君追討論文集 埼玉地
域文化の研究』

写真図版



遺跡全景



第1号住居跡（上から）



第1号住居跡



第2号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第7图1



第7图2



第7图3



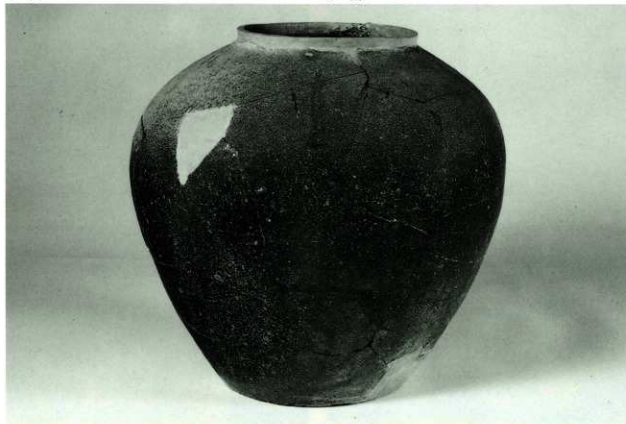
第7图8



第7图6



第7图11



第7图12

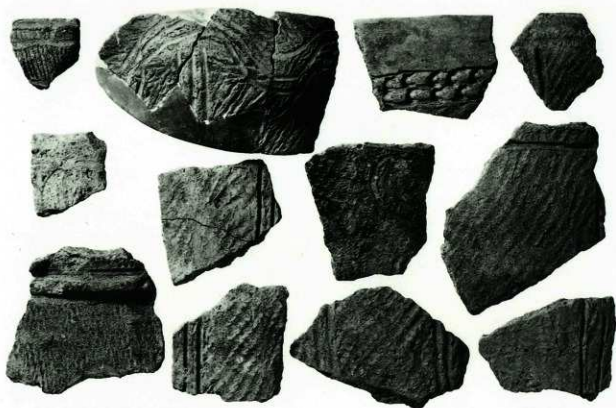
第1号住居跡出土遺物



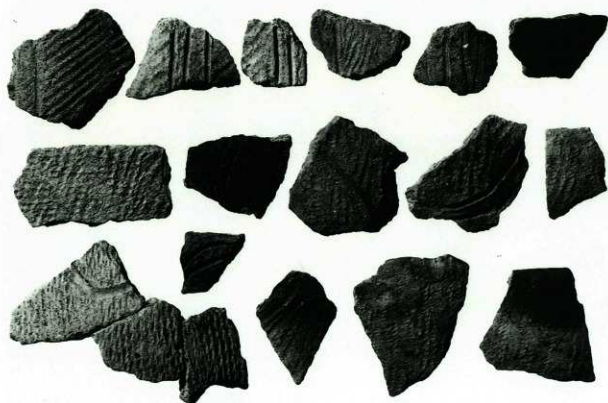
第1号土坑



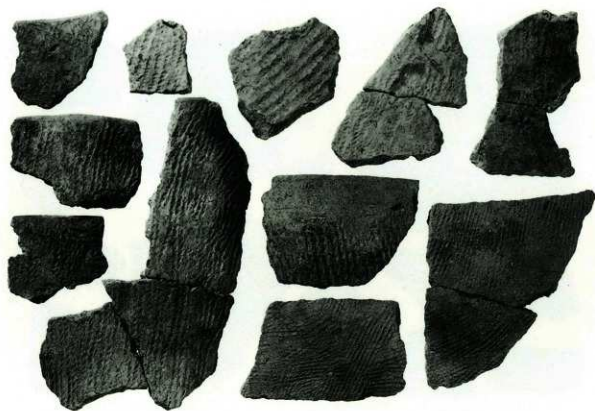
第2号土坑



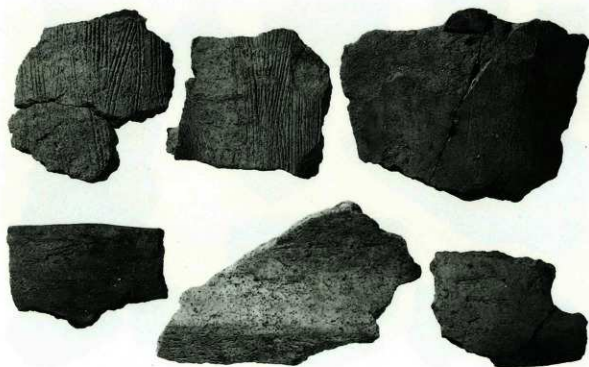
織文土器 (1)



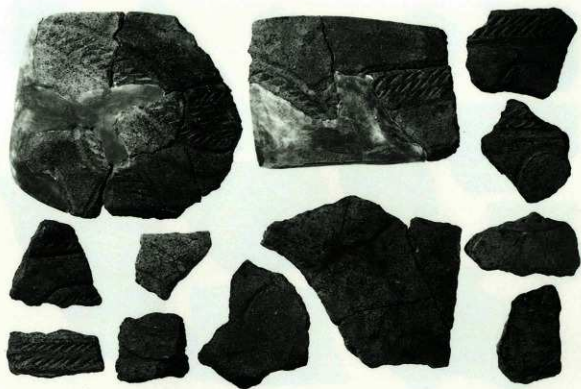
織文土器 (2)



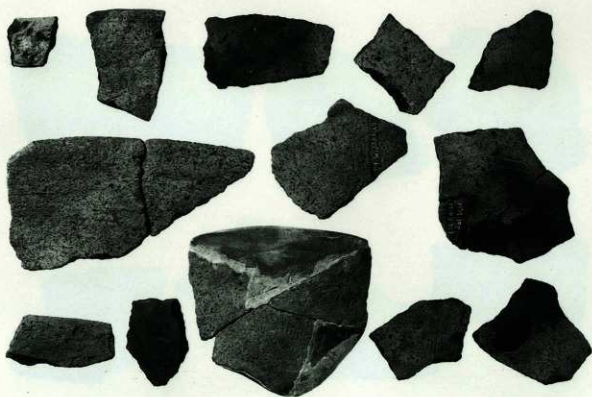
縄文土器 (3)



縄文土器 (4)



縄文土器 (5)



縄文土器 (6)

発掘調査抄録

ふりがな	おおやまいせき だいきゅうじ							
書名	大山遺跡 第9次							
副書名	県立がんセンター病棟新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第180集							
著者氏名	金子直行・宮瀧由紀子							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字舟木884 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦1996(平成8)年5月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおやまいせきだいきゅうじ 大山遺跡第9次	さいたまけん きたあたりちぐん いなま ち おおあざ こむら あざおおやま 埼玉県北足立郡伊奈町大 字小室字大山818番地他	11301	62	35°58' 35°	139°37' 28°	19950401～ 19950431	1500	病棟新築
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大山遺跡第9次	集落跡	縄文時代 古墳時代 平安時代	中期 前期	土壇 2基 竪穴住居跡 1軒 竪穴住居跡 1軒	縄文土器 平安時代 土師器 須恵器	中期～晩期		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第180集

伊 奈 町

大山遺跡 第9次

県立がんセンター病棟新築に伴う埋蔵文化財調査報告

平成8年5月25日 印刷

平成8年5月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884
電話 0493-39-3955
印刷／有限会社 平電子印刷所